

文化庁委託事業報告書

---

東日本大震災において危機的状況が  
危惧される方言の実態に関する調査研究  
(岩手県)

---

平成 25 年 (2013 年) 3 月

文化庁委託事業報告書  
東日本大震災において危機的状況が  
危惧される方言の実態に関する調査研究  
(岩手県)

目 次

まえがき	大野眞男	1
第1章. 岩手県被災地方言の現状について —危機言語尺度の観点から—	大野眞男	7
第2章. 被災地の言語意識		
被災地住民の言語意識 大野眞男・齋藤孝滋・大橋純一・田中宣廣		31
被災地の行政職員の方言意識 —岩手県職員, 宮古市職員— 田中宣廣		73
被災地支援者の方言意識 —岩手県宮古市での例から— 田中宣廣		87
第3章. 被災地方言の記録		
岩手県方言の音声の概要 大橋純一		119
岩手県大槌町方言 大橋純一		127
談話資料: 釜石市(1) 津波から生き残るために —両石地区— 竹田晃子		161

談話資料：釜石市(2) 胸まで太平洋が来た  
—唐丹地区— 竹田晃子 205

談話資料：大船渡市 「我慢強い」ではなく「辛抱強い」  
—大船渡地区— 竹田晃子 223

岩手方言の特徴と陸前高田市方言  
齋藤孝滋 261

#### 第4章. 外国人の被災と言葉

被災地の外国人の言語生活  
—陸前高田・大船渡の結婚移住女性の事例を中心として—  
松岡洋子 281

災害時の日本語  
—東北3県における在日外国人調査結果をもとに—  
山下暁美 291

#### 第5章. 昭和初期の方言調査資料について

小島聡子・竹田晃子 311

## ま え が き

あの壊滅的な被害から二回の冬が経過し、三度目の春を迎えようとしている。瓦礫だけは目の届かないところに移されたが、家の土台を残してなにもかも流された街並みは寂しく静まり返ったまま、そこには人の声が聞こえない。数えきれない家族の思い出を残したまま、人々の暮らしの場は移ってしまった。避難所生活を経て仮設住宅へ、あるいは内陸部の都市へ、仙台へと、生きていくために多くの人たちが移り住んでいった。

今は産業やインフラの回復が最優先であることはいままでもない。働く場所がなければ、地域の暮らしは成り立たない。水産業を中心とする地場産業の復活に向け、港湾整備などの諸課題を乗り越えて力強く行政施策が推進されることを期待するが、現実的にはまだまだ多くの時間を必要とするだろう。それでも人々の気持ちは、その場所にしっかりと残されていた。

多くの町の祭礼は、かつての規模ではないにしろ、いちはやく次の夏には復活した。町を離れた人たちも、みな帰ってきた。こころの復興が、産業の復興を牽引するかのようになり、神輿がおどり、虎舞いが跳ね、その日だけはかつての勇壮な賑わいがかえってきたのである。そこには、人々の喜びの音がひびき、方言と呼ばれてきた地域の言葉で声を掛け合い、強い連帯の絆をあらためて確認しあうのであった。

「がんばっぺし！」とは、被災直後に沿岸各地で自然発生的に生まれた復興スローガンである。地域で暮らしてきた者同士がお互いを励まし合うために、自然と口をついて出た、地域語に根差した表現であった。被災地の人々の復興への強い意志を、確かにそこには聴き取ることができる。

言葉は、それを使って意思を伝え合う人々の共同体を離れては存在しない。その共同体で繰り広げられる日々の生活を離れては存在しない。博物学者が、からからに乾燥した植物標本や昆虫標本作製することが生物学の発展に貢献してきたことは否定できないが、その草や虫がどのような風土や環境の一部として存在していたかという文脈を捨象することは、現代のエコロジーにおいてはもはやできない。

言葉の場合も、かつての体系的調査の重要性には変わらないものの、その言葉をコミュニケーションの手段として共有する共同体全体をとらえる視点が欠かせない。継続的な社

会文化的価値観の転移にさらされている場合はもちろんのこと、突如襲った厳しい自然災害によって物理的に共同体が大きく傷つき危機にさらされている場合にはなおさらである。なぜならば、言葉は、それを使って思いを伝え合う人々を離れては存在しえないからである。

文化庁事業「東日本大震災において危機的状況が危惧される方言の実態に関する調査研究（岩手県）」においては、上記の立場に立って、岩手県の被災地が置かれた危機的状況の分析、危機的状況が危惧される沿岸部方言の特色記述、被災時の体験や地域の歴史・文化に関する方言談話の記録（文字資料及び音声資料）、地域に伝わる伝説や昔話などの言語文化資料に関する記録、埋もれていた被災各地の方言資料の発掘、被災地域に暮らす定住外国人の置かれた社会言語学的状況の記述、などの広範な取り組みを行った。本報告書は、その成果の概要をまとめたものである。担当者からの原稿の集約は極めて短期間に行ったが、最終的に各節の体裁が一貫しない部分が残ってしまったこと、採録した談話すべてを紙数の制約のため報告書に盛り込むことができなかつたこと等は、編者である大野の責任である。採録させていただいた談話や昔話の語りなどの音声資料については、編集しCD化した上で地域の言語文化資料として地域の皆様に還元する必要があるが、今年度の事業ではそこまでは実現できなかつた。地域に伝わる伝説や昔話については、文字資料として別冊報告書・被災地の言語文化資料としてまとめることができた。

実質的な調査活動は平成 24 年の夏以降に開始したが、北上山地の峠越えが難しくなる降雪期の前に大方の作業を終えなければならず、岩手県沿岸部のすべての地域を対象とすることができなかつた。そのため、沿岸部全体を視野に入れつつも、直接の臨地調査の対象としては、大津波による人的被害が甚大であった三陸南部から中部にかけての地域に絞り込んだ。震災が沿岸北部の地域でも大きな傷跡を残したことは、本事業に関わった者達全員が深く胸に刻んでいる。

本事業において被災地域の方言に関する調査を遂行し報告書としてまとめるに当たっては、実に多くの方々にお世話になった。陸前高田市教育委員会、同市観光物産協会、大船渡市山浦医院、釜石市役所、釜石市教育委員会、釜石で民話を語り伝える「漁火の会」、大槌町教育委員会、大槌町芸術文化協会、岩手県立図書館、盛岡市立図書館、山田町立図書館、宮古市役所、岩手県立大学短期大学部などの組織・機関にご協力をいただいた。

また、被災地域に暮らす定住外国人関係の調査に当たっては、岩手県国際交流協会、陸前高田市国際交流協会、カリタス大船渡ベース、地ノ森いこいの家、岩手 NPO-NET サポート、花巻市政策推進部、花巻市市議会、花巻市立花巻北中学校、北上市企画部、北上市市議会、富士大学、釜石市教育委員会、宮城県国際化協会、塩竈市教育委員会、岩沼市総務部さわやか市政推進課、日本語講座いわぬまアイビー、仙台ランゲージスクール、仙台イングリッシュセンター、宮城教育大学、福島大学、田村市国際交流協会、つばさ日中ハーフ支援会、ビックパレット福島、朝日新聞館山支社のご協力を得た。

談話収録や言語意識聴き取り調査にご協力くださった方の中には、仮設住宅で被災後の不自由な生活を送っていらっしゃる方々も少なからずいらっしゃった。いちいちのお名前をすべてあげることはできないが、貴重な時間をお割き下さった皆さまに、深くお礼を申し上げます。

この報告書が、被災地域の文化の復興、こころの復興について考えていく小さなきっかけとなることを、震災二年忌を前にして心に念じている。

平成 25 年（2013 年）3 月 3 日

岩手大学教授  
大野眞男



## 第1章. 岩手県被災地方言の現状について

---





# 岩手県被災地方言の現状について

## —危機言語尺度の観点から—

大野眞男

### 1. 言語の危機的状況に関する先行研究について

日本語諸方言の一分派である岩手県沿岸部方言が震災と津波により危機的状況が懸念される程度について考察するに当たり、世界の独立言語の危機的状況に関する先行研究の枠組みを参照することは、言語と方言のレベル差を無視した分析との批判を受ける可能性もある。しかしながら、木部（2011）にも述べられているように言語と方言の定義は社会的・政治的な性格が強く、言語学的には両者は連続的な側面を持つことが多い。また、近・現代における日本の言語生活を想定した場合、特に地方において方言と共通語（標準語）は対立的な変異としてとらえられてきたことを考え合わせると、言語の危機的状況の分析枠組みは、本稿で対象とする被災地方言も含めて、日本語諸方言の今後の状況を展望する上でも少なからず参考となるものと考ええる。

諸言語の危機的状況の評価に関しては、グローバル化と優勢言語（国家語等）の寡占状況が進展する1990年代以降、目立って多くの研究が行われるようになってきた。主要なものとして、Fishman（1991）、Crystal（2000）、Nettle and Romaine（2001）、UNESCO Ad Hoc Expert Group on Endangered Languages（2003）などがあげられる。

優勢言語への言語交替 language shift の要因として、Fishman（1991）は、物理的人口動態的混乱 physical and demographic dislocation、社会的混乱 social dislocation、文化的混乱 cultural dislocation の三つをあげている。Crystal（2000）は、天変地異・疫病・

共同体の崩壊など、人々を身体的危険にさらす要因と、政治的・社会的・経済的な圧力など、民族の文化を変える要因とに大きく二分している。Nettle and Romaine (2001)は、言語喪失のタイプとして、その言語を話す人々が存在を停止する人口喪失による言語喪失と、ある言語から別の言語への変更 shift によっておきる言語喪失に二分しており、さらに後者を強制的変更と自発的変更とに分けている。

上記の分類に共通していることは、言語消失あるいは変更の要因が、物理的災厄と社会文化的圧力に分けて考えられ、また、複数の要因が複合的に作用するという点である。岩手県沿岸部地域方言の状況を想定した場合、

震災以前にどのような社会文化的状況に置かれていたか

震災と津波によりどのような物理的災厄（人的被害）がもたらされたか

物理的災厄が震災後にどのような社会文化的状況をもたらしているか

の三つの側面について分析を行うことが求められる。

## 2. 危機的状況の評価

危機的状況の評価については、Fishman (1991)では、少数言語復興の立場から逆行性言語シフトのモデルとして段階別世代間崩壊尺度（Graded Intergenerational Disruption Scale: GIDS）を呈示している。この尺度は、最も危機的な段階から安定的な段階まで、概略以下のような8段階で構成されている。

段階8 孤立して残されているわずかな高齢者だけがその言語を話している。

段階7 社会的にまとまった話し手集団がいるが、彼らは既に子育て世代を超えてしまっている。

段階6 お互いに近隣に居住し特定の社会慣習を共有する多人数の話し手がおり、最も重要なこととして、彼らが子供に対してその言語で話している。自然に世代間伝達する活力を持っている段階である。

段階5 話し言葉としての活力のみでなく、家庭・地域・学校において書き言葉としての活力をも持っている。

段階4 その言語が就学前及び小学校教育の中で使われている。

段階3 その言語が、家庭や地域以外に、多言語的な職場において、他言語の話し手とのやりとりにある程度使われている。

段階2 その言語が、地方政府のサービスやマスメディアである程度利用可能である。

段階1 その言語が、高等教育、高等な職域、政府、メディアにおいて使われている。  
本論で対象とする地域の方言の状況評価には段階5～1を想定することは意味がないが、  
世代間伝達という側面に注目した場合、段階6であるか段階7であるかは今後の地域方言  
の動向を予測する重要な観点となる。

なお、Krauss(1992)は、世界の諸言語を、子供たちがすでに学ばなくなっている「瀕死  
の状態 moribund」言語、21世紀の間に子供たちが学ばなくなる可能性のある「危機に瀕  
した endangered」言語、「安泰な safe」言語に分類しているが、ここでもやはり次世代の  
子供たちが継承するかどうかは危機的状況の判断に重要な観点となっている。

### 3. UNESCO による言語の体力測定尺度

上記のほか、さまざまな評価尺度が存在するが、本論では、木部暢子・山田真寛(2011)、  
木部暢子・盛思超(2011)、木部暢子・山田真寛・下地賀代子(2011)により日本国内方言に  
適応された実績を持つ UNESCO Ad Hoc Expert Group on Endangered Languages (2003) (以  
下、UNESCO(2003)と略称)を参照する。UNESCO(2003)は、以下の九つの項目から総合的に  
言語の体力 vitality を測定すると同時に、危機の程度をも判断することになる(日本語  
訳については、以下の項目及び項目下の評価指標を含めて木部暢子・山田真寛(2011)によ  
る)。

- (1) 言語がどの程度次の世代に伝承されているか (Intergenerational Language Transmission)
- (2) 母語話者数 (Absolute Number of Speakers)
- (3) コミュニティー全体に占める話者の割合 (Proportion of Speakers within the Total Population)
- (4) どのような場面で言語が使用されているか (Trends in Existing Language Domain)
- (5) 伝統的な場面以外で新たに言語が使用されている場面がどの程度あるか (Response to New Domains and Media)
- (6) 教育に利用される言語資料がどの程度あるか (Materials for Language Education and Literacy)
- (7) 国の言語政策 (明示的、非明示的態度を問わず) (Government and Institutional Language Attitudes and Policies, including Official Status and Use)

(8) コミュニティ内での言語に対する態度 (Community Members' Attitudes toward Their Own Language)

(9) 言語記述の量と質 (Amount and Quality of Documentation)

以上の九つの項目の下に、該当する状況を判断する5から0までの六つの評価指標がそれぞれ示されている。

#### 4. 岩手県沿岸部方言の状況に関する分析

岩手県沿岸部方言といっても、置かれている状況や被災の程度は多様であって、必ずしも一括して論じられるわけではないが、被災直後にあつて各市町村個別の現状を把握できるだけの数量的調査を実施することは到底不可能であつた。今回、言語意識に関する聴き取り調査の対象としたのは、震災と津波による人的被害が甚大であつた宮古から陸前高田の沿岸南部地域であつたが、各種統計資料により北部地域も視野に入れて、岩手県沿岸部方言の全体的状況について判断する。また、UNESCO(2003)の尺度には、そのまま岩手県沿岸部方言の現状評価に適応することが、必ずしも適切ではない項目も含まれているが、先行の琉球方言等を対象とした木部・山田・下地(2011)との比較の観点から尺度の修正をしない。

##### 4-1. どの程度次の世代に伝承されているか。

UNESCO(2003)では、この項目に以下の評価指標が示されている。

5. 子どもたちを含むすべての世代でその言語が使用されている。
4. その言語はすべての子供たちが、一定の限られた場面で使用している。
3. その言語は親の世代以上で使用されており、子どもたちは使用していない。
2. その言語は祖父母の世代以上で使用されており、親、子の世代は使用していない。
1. その言語は曾祖父母以上の世代で使用されており、ほとんどの話者は使用していない。
0. その言語を使用する者はいない。

上記のうちで、【2～3】の状況と判定される。

詳細に調査を行えば地点ごとの状況の違いもあるに違いないが、本事業による言語意識調査結果(次章参照)を見る限り、子どもたちが一定の限られた場面とはいえ方言を活発に使用している実態は確認できなかった。なお、言語意識調査については、統計的分析が

可能な社会学的手法に基づく数量調査が被災後の状況で不可能であったために、対応可能な方からの聴き取り調査の手法で行ったものである。聞き取り調査の対象者が高年齢層であったために、子どもたちの実態というよりは高年齢層の意識実態であったかもしれないが、以下にその一部を示したように、地域の子どもたちが方言をあまり使用していないことがうかがわれる。

【女性C】ただ、方言について、子どもがね、家庭の中で方言に接するということがなくなっているんじゃないかと。とてもきれいな言葉で話すんですよ。幼稚園に通ってる子ども、保育所に通ってる子ども、みんな同じようにテレビで知った言葉とかね、それがすごい私には悲しいんですね。どうしてそういう言葉だけで、子どもたちが話すようになってしまったんだろうってね。

[陸前高田市・言語意識の聴き取り 1]

【男性G】やっぱり、こういうもの(方言)は、本当は残しておきたいんだけどもね。私なんかも、つくづく感ずるんだけども、孫は、今度小学校1年生になるんですね。ところが、孫の言う言葉が、今、とても立派な言葉を言うんだねえ。

[陸前高田市・言語意識の聴き取り 2]

また、高年齢層には、孫たちに向かって方言を使って話すことに対して強い抑制的な意識があることもうかがわれる。これは、かつての標準語教育の名残であり、若年齢層には別の意識が存在する可能性もあるが、今回の調査では確認できなかった。

#### 4-2. 母語話者数

#### 4-3. コミュニティー全体に占める方言話者の割合

この二つの項目は、木部暢子・山田真寛(2011)、木部暢子・山田真寛・下地賀代子(2011)にも述べられているように、正確な数字を把握することが極めて困難である。ここでは、対象地域における震災前後の人口動態と、主たる方言使用者である高年齢層及び中年年齢層人口の概要を推定し、直接の検討材料とする。

岩手県の人口は、昭和60年(1985年)1,433,611人から減少傾向になり、平成5年(1993年)にいったんは増加に転じたものの、平成9年(1997年)から再び減少傾向に転じて、減少幅は平成18年(2006年)以降6年連続で1万人を超えている。岩手県政策地域部調査統計課『図説いわて統計白書2012』によると、図1に見られるように全般的な少子高齢化に加えて、図2で明らかなように特に沿岸部の人口減少が著しいことが指摘されている。

図1. 岩手県の年齢別構成の推移

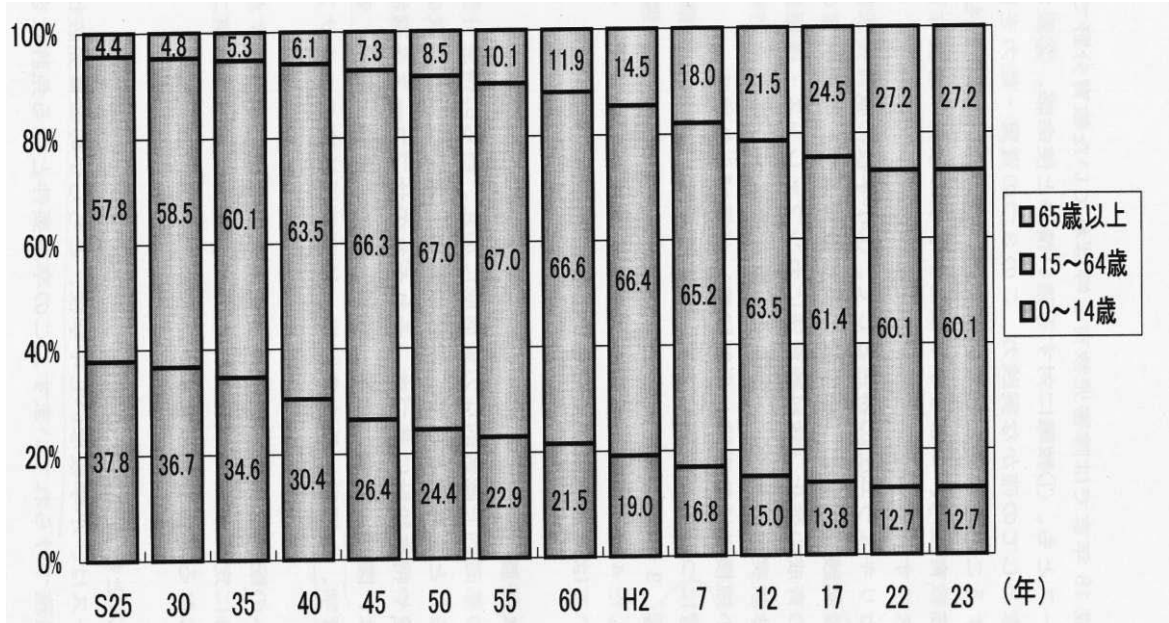
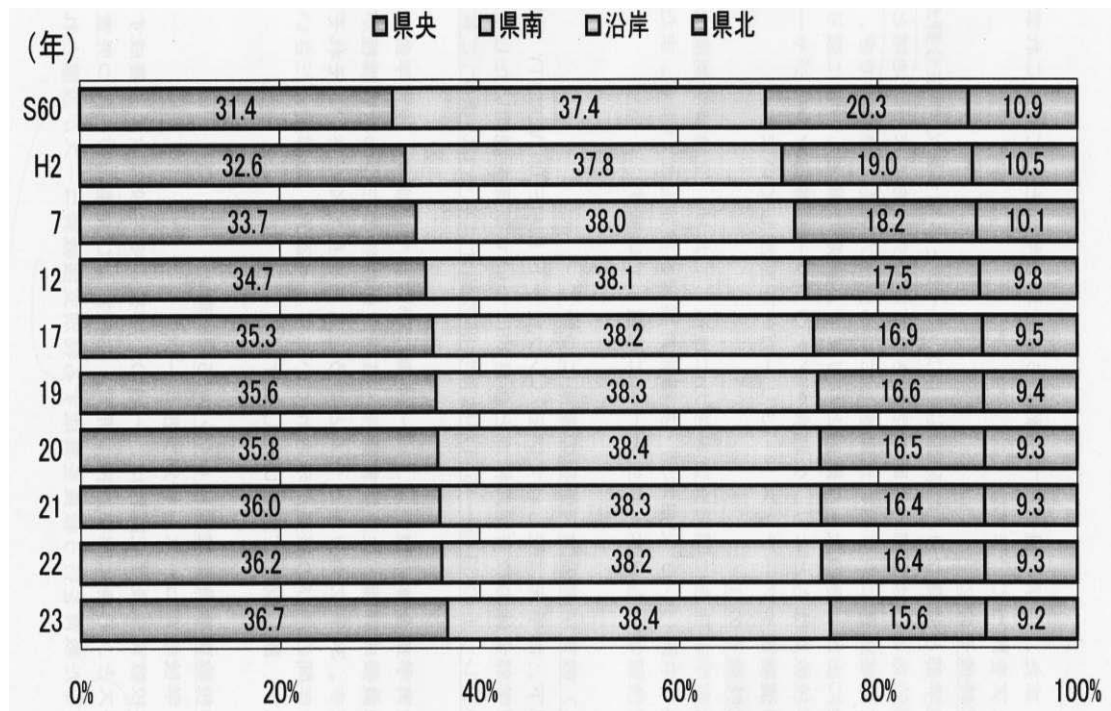


図2. 岩手県内広域振興圏別人口の構成比の推移



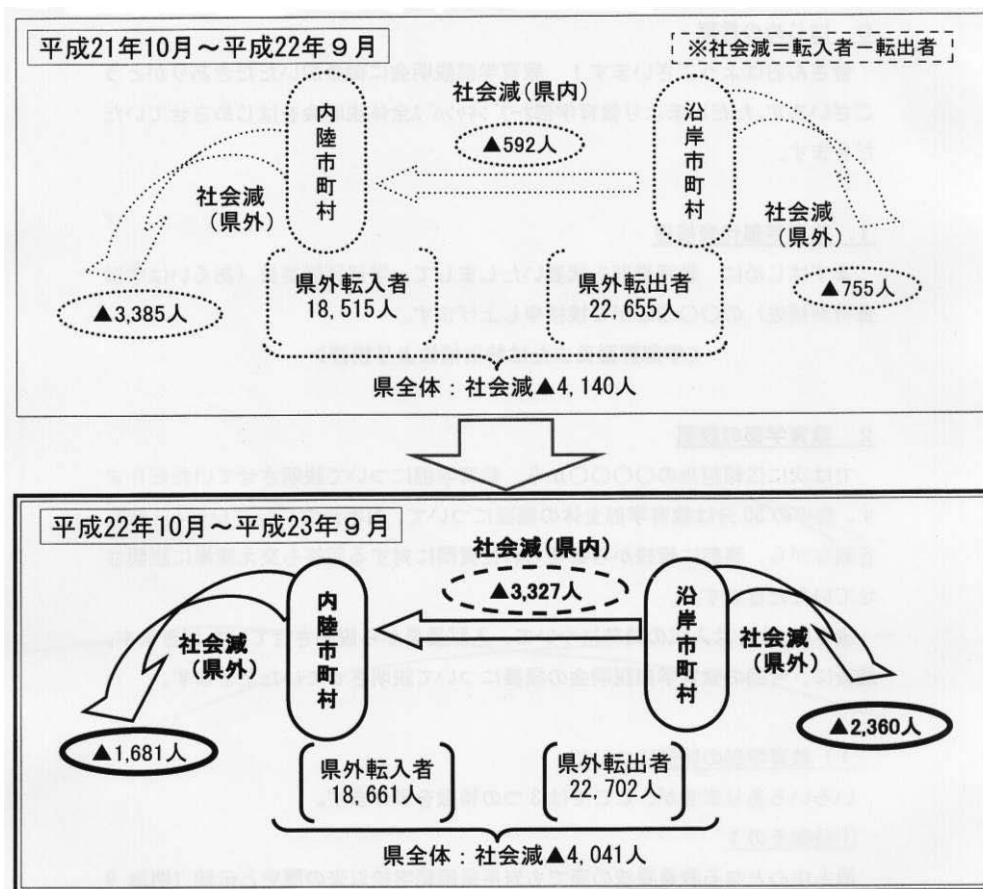
本報告で対象地域として取り上げた6市町村について、岩手県保健福祉部企画室「平成22年度保健福祉年報（人口動態編）」・「平成23年度同年報」をもとに、震災前の平成22年10月（上段）と震災後の平成23年10月（下段）の年齢別人口を示すと以下の通りである（不詳は60歳以上に含めた）。

	0～19歳	20～39歳	40～60歳	60歳以上	総数
陸前高田市	3,667	3,710	5,909	10,014	23,300
	3,328	2,939	5,213	8,772	20,252
大船渡市	6,675	7,405	10,689	15,968	40,737
	6,415	6,707	10,338	15,637	39,097
釜石市	5,840	6,444	10,195	17,095	39,574
	5,647	5,863	9,589	16,172	37,271
大槌町	2,398	2,516	4,043	6,319	15,276
	2,086	1,920	3,463	5,212	12,681
山田町	3,132	3,178	4,677	7,630	18,617
	2,886	2,754	4,291	6,972	16,903
宮古市	9,733	10,636	15,506	23,555	59,430
	9,529	10,061	15,114	23,248	57,952

震災に伴う津波による死者・行方不明者が6千人を超える状況を反映して、各地域の各世代で大幅な人口減少が見られるが、これらの数字は震災による自然減のみにとどまらない。被災後わずか半年の間に、現地で生活の目途を立てることのできない転出者による社会減が、大幅に増大していたことを示している。『図説いわて統計白書2012』は、沿岸部市町村を中心とした人口動態を図3のようにまとめている。震災以前においても沿岸部から内陸部もしくは県外への転出傾向が見られたが、震災以降はこの傾向がますます顕著となり、平成22年10月から一年間の転出者数は、前年を一桁上回る数字となっている。この傾向は震災から2年経った現在でも続いており、特に地域で職場を失った若い世代において深刻な状況となっている。



図3. 岩手県沿岸市町村を中心とした人口の社会移動



前項で、地域方言で日常生活を送っているのは祖父母の世代あるいは親の世代以上と判断したが、それぞれ60歳以上、40歳以上と想定した場合、各地域における方言話者数と地域社会全体に占める割合は以下の通りである（上段は平成22年10月、下段は平成23年10月）。

	祖父母の世代以上	親の世代以上
陸前高田市	10,014 (43.0%)	15,923 (68.3%)
	8,722 (43.3%)	13,985 (69.1%)
大船渡市	15,968 (39.2%)	26,657 (65.4%)
	15,637 (40.0%)	25,975 (66.4%)
釜石市	17,095 (43.2%)	27,290 (69.0%)
	16,172 (43.4%)	25,761 (69.1%)

大槌町	6,319 (41.4%)	10,362 (67.8%)
	5,212 (41.1%)	8,675 (68.4%)
山田町	7,630 (41.0%)	12,307 (66.1%)
	6,972 (41.2%)	11,263 (66.6%)
宮古市	23,555 (39.6%)	39,061 (65.7%)
	23,248 (40.1%)	38,362 (66.2%)

UNESCO(2003)では、「コミュニティー全体に占める話者の割合」の項目に以下の評価指標が示されている。

5. 全員がその言語を使用している。
4. ほぼ全員がその言語を使用している。
3. その言語を使用している者が大半を占める。
2. その言語を使用している者は少数派である。
1. その言語を使用する者はほとんどいない。
0. 誰もその言語を使用していない。

上記のうちで、【3】の状況と判定される。

なお、地域方言で生活する60歳以上の高年層が4割程度、40～59歳の中年層も含めると安定的に大半を占めている。しかし、逆に若い世代の人口が地域方言をあまり使用していない実態、40歳未満の若い世代の絶対人数、働き盛りの若い世代の県内外への転出による人口の社会減等を考えると、将来に向けて地域方言は安定的な状態に置かれているとは決して言えない。

#### 4-4. どのような場面で使用されているか。

UNESCO(2003)では、この項目に以下の評価指標が示されている。

5. その言語はすべての場面で、すべての目的のために使用されている。
4. 二つ以上の言語が、すべての場面ですべての目的のために使用されている。
3. その言語は家庭では使用されているが、支配的言語が家庭でも使われ始めた。
2. その言語は限られた場面、いくつかの目的のために使用されている。
1. その言語はごく限られた場面で使用されるだけで、機能的に使用されることはほとんどない。

0. その言語はどんな場面のどんな目的のためにも使用されていない。

上記のうちで、【2～3】の状況と判定される。

一般的に、地域方言と共通語・標準語が併用される状況にあり、公の場面と私的な場面で使い分けが行われていることは、他の地域と全く同様である。

【女性A】(方言を)使ってほしいとは思うけど……。私らちっちゃいころはもう、田舎の子どもっていう感じがあったけど、今はここの子どもだちも、東京の子どもだちも、みんな同じですもんね。うん。要するにやっぱり、家では言ってるけど、公の場では言わない。今どきの子どもは。(方言が)嫌なわけではないと思うけど。

[大槌町・言語意識の聴き取り 1]

【司会】共通語を使う機会って増えましたか。

【男性A】まあ、災害によらず、近代になってから、増えてきてるべね。昔と違ってね。

【男性B】んだ。昔とは違う。

【男性A】災害(津波)があったがら特になってなく。徐々にそういうその表現がね、今、はやりになってきてるっていうのがね。

[大槌町・言語意識の聴き取り 2]

言語生活が営まれる多様な社会的場面の中で、地域言語が次世代に継承されるためには、家庭内での使用が不可欠であることは、Fishman (1991)をはじめとする先行研究でも強調されている。しかしながら、以下のように家庭での方言使用は退潮傾向にあることがうかがわれる。

【司会】なんで家庭の中で方言を使わなくなってしまったのでしょうかね。

【女性C】親が使えなくなっているからですよ。ああ、違うんでしょうかね。そして、伝承しようという意識もあまりないんじゃないですか。

【女性D】ないですよ。

【女性C】外に出たときに、スムーズにこう言えるようにというほうが、大事なんだかもしれないです、親にとってはね。

[陸前高田市・言語意識の聴き取り 1]

家庭内で方言が使われにくくなったことの要因としては、以下の聴き取りにもあるように、昔ながらの婚姻圏が全国的に拡大されたこと、核家族化、などの家族構成に関する変化が、共通語化以外にも影響していることが推察される。

【女性B】家族構成がいま違っているじゃないですか。昔だったら、近所から嫁ごさ  
来たっつあ、婿さ来たっつあって、変える意味合い一つもないのに、つついそれ  
で育ててしまうから、ごく普通に耳慣れたんですけど。今、んだって全国から来て  
んだもんねえって、私は感じますけどね。教えっぺって、教えるんじゃないくて、普  
段の生活の中にあっただもんね。

[陸前高田市・言語意識の聴き取り 1]

【男性A】今はやっぱり、(方言を使わないように)気をつけてやってる方もいますよ。  
昔はね、その地域だら地域の結婚がね、町方から来るどかってことはなかったんで  
すよ。それ今、東京から来たり、青森がら来たり、北海道から来たりね。みんな入  
れ替わって、どこの嫁さんがね、どこだかわがらなんですよ。

[大槌町・言語意識の聴き取り 2]

【女性A】年寄りが一緒に暮らした家の子は、まだいいんです。ところが、分家した  
とか、本当は長男なんだけれども、そっから出た若い夫婦は若い夫婦で子どもを育  
てて、年寄りたちは年寄りたちで家にいるみたいな暮らしをした人たちの場合は、  
言葉というのは、もう半分以上消えてんじゃないかなあ。半分なんてないと思いま  
すよ。

[山田町・言語意識の聴き取り]

4-5. 伝統的な場面以外で、新たに使用されている場面がどの程度あるか。

UNESCO(2003)では、この項目に以下の評価指標が示されている。

5. その言語は新たに生活に加わったどんな場面でも使用されている。
4. その言語は新たに生活に加わったほとんどの場面でも使用されている。
3. その言語は新たに生活に加わった多くの場面でも使用されている。
2. その言語は新たに生活に加わったいくつかの場面でも使用されている。
1. その言語は新たに生活に加わった場面ではほとんど使用されていない。
0. その言語は新たに生活に加わった場面では使用されていない。

上記のうちで、【1~2】の状況と判定される。

ここでいう「新たに生活に入った場面」とは、ラジオやテレビなどのマス・メディアを  
指すものと思われる。一般的に、日本各地の地方放送局では、各地の地域方言によるプロ  
グラムを運営し、地域住民からも支持されているという現在の状況がある。岩手県域の場

合も、沿岸部方言に限定されることはないが、民間局を中心として方言を多用する番組や企画が複数あり、視聴者から高い人気を博している。また、被災時の災害FMにおいても、方言を使用したプログラムがあったことが聴き取りからうかがわれる。

【司会】地域で方言を使ったFM放送があるような話も聞いてきましたが。

【女性D】ええ、災害FMにも。で、私たちの仲間が、私もやりましたけども、岩手の民話のような。最初は全部方言、高田ばかりじゃなくて、二戸とか、県内ですので、ニュアンスが違うんですね。高田弁で全部やれるっていうわけでもなくて、本に忠実になっているのが頭にあって、その原稿を読んだ時点で、えっ、ちょっとこれは大変だって思ったんですね。それでまあ、聞く人もこの辺の人で、まあ分かってても分かんなくても流したいのでっていうことで、あまり技術的なことは問わないという約束で放送したんです。

[陸前高田市・言語意識の聴き取り 1]

#### 4-6. 教育に利用されうる言語資料がどの程度あるか。

UNESCO(2003)では、この項目に以下の評価指標が示されている。

5. 確立された書記法と、伝統的な文法記述、辞書、文字資料、文学が存在する。行政、教育で使われる書き言葉がある。
4. 文字資料が存在し、子どもたちは学校でその言語の使用を学んでいる。行政の書き言葉でその言語は使用されていない。
3. 文字資料が存在し、子どもたちは学校でそれに触れる機会がある。その言語の使用は推奨されてはいない。
2. 文字資料は存在するが、コミュニティー内の限られた者にしか利用されていない。ある者にとって文字使用は象徴的意味を持つことがある。その言語の使用は学校教育には取り入れられていない。
1. 書記法が存在することは知られている。それで書かれた文字資料がいくつかある。
0. 書記法は存在しない。

上記のうちで、【2】の状況と判定される。

UNESCO(2003)では書記法 orthography に比重が置かれているが、独立言語ではなく方言を対象とした場合には、書記法ではなく、言語資料一般の利活用状況を対象に判断しなければならないだろう。

近年の学校教育においては、総合的学習の時間に地域方言について調べ学習をするような試みも見られるが、教育に利用されうる言語資料というものが用意されているわけではない。例外的なケースとして、学校教育の場ではないが、私的な地域教育（ケセン語勉強会）の場での使用を想定した教科書として、山浦玄嗣『みんなのケセン語』1及び2（共和印刷・1992年）が大船渡市で刊行されている。

なお、言語意識の聴き取り調査において、以下のように地域方言を素材に活用したメモ帳を考案した印刷業者の方の談話もあり、ある程度教材に準じた活用のされ方が行われていることがわかる。

【司会】言葉も文化財だっていう考え方がありますが、どう考えられますか。

【男性A】そのとおりだと思いますね、やっぱりね。ええ。方言メモ帳をつくったのもその一つなんですけども、なんとかやっぱりね、こう、少しでも残していきたいなという思いもあってつくったんですけどね。ただこのまま、こう渡しても、すぐそのまま方言というので話せないんですけども、それでもやっぱりなんかね、言葉として、こう、実際、売れるものがあればなという。〈注〉男性A氏の経営する印刷会社で発行している方言メモ帳について語っている。陸前高田の方言がイラストともに描かれている。〉

【司会】買っていくのは、大人ですか、子どもですか。

【男性A】いろいろですね。結構年配者の方も多んですけども、子どもたちは、かわいいとかね、面白いとかって買っていく人もいる。だいたい、こう、売るときに、方言の話がそこでこう。これ1冊買うのもしばらく、30分ぐらい話をしています。

【女性D】そうですね。

【男性A】みんなで、話語りしながら、こう、方言の話が出てね。

【女性B】ああ、なるほどね。ああ。こうすればね。

〔陸前高田市・言語意識の聴き取り1〕

#### 4-7. 国の言語政策（明示的、非明示的態度を問わず）

UNESCO(2003)では、この項目に以下の評価指標が示されている。

5. 国内のすべての言語が保護されている。
4. その言語は保護されているが、主に家庭など限られた場面で使用され、公的には使用されていない。

3. その言語に関する保護政策は施行されていない。公的場面では支配的言語が使用される。
2. 政府は支配的言語の使用を勧めている。その言語に関する保護政策は施行されていない。
1. 支配的言語のみが公的に使用され、その言語は保護や認知すらされていない。
0. その言語の使用が禁止されている。

上記のうちで、【2～3】の状況と判定される。

この項における支配的言語とは、標準語あるいは共通語に相当する。近代以降、第二次世界大戦の敗戦に至るまでの日本の言語政策は、海外植民地等を含めて、国家語としての標準語の使用を励行するものであり、東北地方においても標準語教育が苛烈に行われ、方言は徹底的に排斥され続けたことはよく知られている。

戦後においては、国がトップダウンに国民に与える標準語に代わって、国民の間の相互交流から自然と育っていく共通語に国語の在り方が変容し、共通語と方言との関係は共生的なものへと変わっていく。例えば、小学校の指導要領においては、公的な場面では共通語を用いるようにするが、必ずしも方言を排除するような指導を求めているわけではない。しかしながら、方言を積極的に保護するような教育政策がとられているわけではない。

加えて、学校現場の教師たちの間では、戦後のこのような国語観の転換に関する認識が浸透しておらず、一方で都市部に働きに出ていく若者たちに言葉の苦勞をさせたくないという現実的必要もあって、戦前の標準語時代と大きく異なる教育が行われているわけではなかった。従って、高年層はもちろんのこと、中年層に至るまで、地域の方言には価値を認めない教育を受けてきたといえるだろう。

#### 4-8. コミュニティー内での言語に対する態度

UNESCO(2003)では、この項目に以下の評価指標が示されている。

5. 全員がその言語を大切にし、使用が推奨されることを望んでいる。
4. ほとんどの者がその言語が次世代にも使われることを支持している。
3. 多くの者がその言語が次世代にも使われることを支持している。その他の者は無関心であるか、その言語が使用されなくなることを望んでいる。
2. その言語が次世代にも使われることを支持している者もいる。その他の者は無関心であるか、その言語が使用されなくなることを望んでいる。

1. その言語が次世代にも使われることを支持している者は少数しかいない。その他の者は無関心であるか、その言語が使用されなくなることを望んでいる。
0. その言語が使用されなくなることに関心がある者はいない。すべての者が支配的言語の使用を望んでいる。

上記のうちで、【2～3】の状況と判定される。

この項目は、Fishman (1991)等における世代間伝達に関して、どのような意識を持っているかを評価するものである。高年層に対する言語意識の聴き取りにおいては、地域方言への強い愛着を訴える回答がほとんどであったが、次世代に継承することについては非常に複雑な思いがうかがわれた。これは、戦前・戦後を通じての標準語・共通語教育において、地域方言の価値が徹底的に否定されてきたことと深い関連があるだろう。高年層は自分たちの思いを存分に表現できる言葉として地域の方言に愛着を抱いているが、一方で、「方言は悪い言葉」という刷り込みが決定的に作用していて、次世代への継承には肯定的な意識を持ってないでいる状況がある。

【女性D】うちもね、主人が国語の教師だったので、そして転勤していきますのでね、家庭内では標準語を使うようにしてたんですね。だから、息子がまだ小学校のころ、うちではお父さん、お母さんって、普通にちゃんとした標準語っていうか共通語で話をしているんですけど、友達が来ているときにね、ある日に、「おらのかあな」とかって。

[陸前高田市・言語意識の聴き取り 1]

【男性H】(笑)標準語を話すべや。

【男性G】標準語でね。んだからねえ、こちらもね、気を付けて言わないと「じいちゃん、何言ってるんだ」て、言われるがらね。やっぱり、こっちさもね、この方言を使うのをね、ためらうんですね。孫の教育のためにねと思ってね。できるだけ、標準語に、孫に合わせて言わねばというような感じで。

【司会】お孫さんには、地域の方言を、受け継いでもらいたいとは思いませんか。

【男性G】無理だべねえ。

[陸前高田市・言語意識の聴き取り 2]

【司会】ご家族と方言を使っておしゃべりになる機会っていうのは、昔と比べて増えましたでしょうか、それとも減りましたでしょうか。

【女性A】少なくなったね。



【女性B】減ったね。

【女性A】うん。お嫁さんだち都会から入って来るとね。

【司会】でも、昔ながらの方々としゃべるときは。

【女性A】そうそうそう。そのまま出てしまうんです。

【司会】じゃあ、使い分けることですかね。今の若い人たち、例えばお孫さんとかとお話しされるときは大槌弁ですか、それとも共通語。

【女性A】うん、やっぱり共通語使わないと。

【女性B】孫がね、言葉がきれいなさ。だからそれをね、普段の言葉で言うと、「何」って言われる。

【女性A】お母さんたちにおごられるもんね。「いらね言葉を聞かせんな」って言うの。

[大槌町・言語意識の聴き取り 1]

高年層は以上のように次世代への継承に積極的とは言えない意識を持っているが、継承される側に立つ若年層がどのような意識を持っているかは、今回は聴き取り調査等を実施することができなかった。もし中年層が、地域方言を聞いてわかるが十全に話すことはできないセミ・ネイティブ状態にあるとすれば、若年層への継承はかなり難しいと思われる。何らかの程度で地域方言の次世代継承を望むのであれば、高年層者の地域方言に対する自己抑制的姿勢の転換を含めて、若年層者が地域方言に接触できる社会的領域の確保あるいは創出が不可欠と思われる。

#### 4-9. 言語記述の質と量

UNESCO(2003)では、この項目に以下の評価指標が示されている。

5. わかりやすい文法記述と文字資料が多く存在し、言語資料が常に生産されている。  
高い質の録音、録画資料が存在する。
4. よい文法記述が一つあるほかにも、文法資料、辞書、文字資料、文学、それに定期的に更新される日常言語使用の資料が存在する。一定の質の録音、録画資料が存在する。
3. 一定の文法資料、辞書、文字資料が存在するが、日常言語使用の資料はない。録音、録画資料は、質の高いものも低いものもあり、文字化されているものや、されていないものもある。
2. 限られた言語学的目的に利用可能な簡単な文法記述、語彙集、文字資料が存在す

るが、総括的なものはない。録音、録画資料は、質の高いものも低いものもあり、文字化されているものや、されていないものもある。

1. 簡単な文法記述、短い語彙集、断片的な文字資料がいくつか存在するのみ。録音・録画資料は存在しないか、利用不可能、もしくはまったく文字化されていない。
0. 言語記述は存在しない。

当該地域の全般的な状況は、上記のうちで【2～3】の状況と判定されるが、大船渡市のみは山浦玄嗣氏のケセン語関係の言語資料が充実した状況である。

まず、全般的な状況については、川越めぐみ（2012）に詳細に報告されており、それによれば岩手県沿岸部被災地域の方言関係文献は、書籍44点、論文66点、市町村誌8点となっている。録音資料については書籍のカテゴリーに含まれており、日本放送協会編『全国方言資料』（1981年・NHK出版）に九戸郡種市町中野（現・洋野町）及び宮古市高浜の談話資料が採録されている。

上記の資料は、主として言語研究者による音声・文法・語彙・方言集・言語行動・談話記述等に関する学術的な内容のものが中心となっているが、専門家にはよらない資料群として戦前期学校教育関係者（教師）による『紀元二千六百年記念郷土教育資料調査報告』（『岩手県郷土教育資料』と通称）が存在する。これらは、岩手県教育会が中心となって昭和15年に岩手県下一斉に実施された調査結果をまとめたもので、各小学校ごとに報告書が作成されており、現在岩手県立図書館に保管されている。小松代融一（1988）によれば昭和11年にも同様の調査が行われことが記されているが、報告書の所在については不詳である。研究的立場からではなく、郷土教育の観点から地元の小学校教師たちがまとめたものであり、記述の詳細にはばらつきがあるが、歴史や地誌に加えて地域方言についても報告されている。これらの資料群の被災地関係分については、本報告書第5章で詳述されている。

大船渡市の山浦玄嗣氏による一連のケセン語関係文献としては、『ケセン語入門』（1986年）、『ケセン語大辞典』（2000年）、『ケセン語の世界』（2007年）等のほか、ケセン語詩集『ケセンの詩』（1988年）、『ケセン語訳新約聖書・四福音書』（2002～2004年）、ケセン語を含め日本各地の方言を駆使して四福音書を訳した『ガリラヤのイエシュー』（2011年）などが刊行されており、関連した音声CDも用意されている。

大震災被災後に出版された新たな文献として、坂口忠『岩手県宮古市宮古 ことばのおくら』（2012年）は700ページを超える大著であり、地域の言葉が復興の拠り所となるこ

とを象徴的に訴えている。

なお、地域方言による文学に相当するものとして、地域に口伝えで伝承されてきた昔話や伝説が豊富に存在するが、残念ながら文学や民俗学関係者により採録されたものは大方が共通語化されており、方言による語り口を存分に残すものとはいえない。今後は、伝承の内容もさることながら、地域方言による語り口も忠実に再現され、できれば録音資料・録画資料として保存活用されることが望まれる。

地域の言葉は、言葉だけで次世代に継承されることはなく、地域語を使って地域のトピックを伝える活動があって、はじめて地域語は次世代に継承される。記録保存にとどまるかどうかの分かれ目が、ここに存在するだろう。本報告においては、このような観点から地域の昔話や伝説などの方言による言語伝承に注目して、別冊に地域の言語文化資料としてまとめた。

## 5. 危機的状況の程度と今後に向けて

上記の9つの項目はすべて重要な指標であるが、UNESCO(2003)によれば、それらはすべてガイドラインであって、対象となる言語の状況や評価の目的によって改変する必要があるとされている。また、対象言語が置かれている状況、何らかの対応が必要かどうか、必要であるならどのような方策が求められるか、等について検討するに当たっては、上記の各項目のうちで、はじめの6項目が最も重要であると述べられている。岩手県沿岸部方言に関して該当6項目の判定は以下のとおりである。

(1) その言語がどの程度次の世代に伝達されているか【2～3】

(2) 母語話者数【数値省略】

(3) コミュニティー全体に占める話者の割合【3】

(4) どのような場面で使用されているか【2～3】

(5) 伝統的場面以外で新たに使用されている場面がどの程度あるか

【1～2】

(6) 教育に利用される言語資料がどの程度あるか【2】

(2)の母語話者数を除いて、仮に判定値を平均すると、【2.0～2.6】ということになる。各項目における各評価指標に与えられた評価語は個別であるが、仮に(1)(3)の項目に与えられた評価段階と評価語を示すと、

5 安全 safe

- 4 安全ではない unsafe
- 3 間違いなく危機に晒されている definitely endangered
- 2 深刻に危機に晒されている severely endangered
- 1 危篤状態において危機に晒されている critically endangered
- 0 既に消滅している extinct

となっている。これに照らすと岩手県沿岸部方言の現状が決して安定的な状況ではないことは明確であろう。

なお、この評定値は、木部暢子・山田真寛・下地賀代子(2011)で危機状況評価の対象とした南方の喜界島・与那国島・多良間島・甌列島とほぼ同様の値となるが、岩手県沿岸部の人口の絶対数が比較的大きいこと（上記四島嶼部はいずれも1万人に大きく満たない）、沿岸部地域の相互交流が緊密に行われていること等を勘案すると、今後の次世代継承に向けての潜在的可能性を大きく残していると判断される。もちろん、その選択権を握っているのは地域の若い世代である。

これに加えて、以下の項目により今後の方向性を占うことができる。

(7) 国の言語政策（明示的、非明示的態度を問わず）【2～3】

(8) コミュニティ内での言語に対する態度【2～3】

どちらも決して希望的な状況とは言えない。ことに(8)に関して、戦前の標準語教育の影響がいまだに尾を引いて残っており、地域方言継承に関する高年層者の自己抑制的意識の壁が存在する。

このような状況は、東日本大震災が発生する以前から対象地域が社会経済的に置かれてきた条件によりもたらされたものであるが、震災後は全体的な状況に拍車がかけられていることに注目しなければならない。すでに4-3で論じたように、震災で直接失われた人的資産が甚大であることに加え、その後の転出による社会減が現在まで続いている状況に早急に歯止めをかけることが喫緊に必要である。

経済産業省・総務省「経済センサス（速報）」（平成25年1月29日）によると、2012年の岩手県全体の事業所数は震災前と比較して9.1%減となったが、被災地では、大槌町72.5%減、山田町60%減、陸前高田市46.6%減、釜石市25.3%減、大船渡市21.9%減となっており、宮城県・福島県の被災地と同様に若い世代の働く場所がないという状況である。Crystal(2000)は、危機的状況に置かれた言語が再生するための6条件の中で、その二つ目として「危機言語は、優位な共同体との比較において話者が富裕になれば発展する」

をあげている。社会経済的な産業基盤が安定し、その社会基盤の上に地域文化が活性化し、地域文化の一部として地域言語も安定的に維持されていく、そのような環境を回復させることが急務である。

また、地域方言が持つ社会的機能についても、もう一度見直していく必要があるだろう。パトリック・ハインリッヒ&松尾慎（2010）は、危機言語が優勢言語より優れた機能を持ち得る点を4点あげている。第一には、地域文化についてのコミュニケーションや地域文化に基づく知識などの分野を語る役割である。これは、祭りや年中行事などの地域固有のトピックや、地域に伝わる伝説・昔話などを地域語で語る機能を指しているだろう。方言を通して、優勢言語である全国共通語では表現できない概念や価値観などが存在することに気づくこと、これらを尊重する態度が求められる。

第二には、社会や文化の状況を改善するために地域意識を高めていくための手段としての役割をあげている。「がんばっぺし、陸前高田」などの方言による復興スローガンがまさにこれに相当する。このような方言によるスローガンは、被災直後から各地で自然発生的に表れてきたが、決して対外的なメッセージではない。被災地域に暮らす者同士がお互いに励まし合い、連帯感を強める機能を持っている。

第三には、社会参与やエンパワーメントの手段としての役割をあげている。気仙地方にその典型を見るように、もともと沿岸部地域は社会経済的にも文化的にも独立心の旺盛な地域であり、その気概を支える精神的支柱として地域言語に対して強い自負心を持っている。対外的に地域アイデンティティーを支える機能に注目したい。

第四に、グローバル化時代の中で国民の概念を変えること、すなわち国内の多様性を肯定することで、世界の多様性に向き合うことを可能とする役割を危機言語は潜在的に持っているという。地域の伝統的な文化や価値観が多様であるのと同じように、また、それらの多様な文化や価値観を背景にして、言葉もまた多様である。このことを積極的に肯定し、胸を張って方言を使い続ける態度は、お互いの異質性を認め合う多文化共生社会づくりのための第一歩になるかもしれない。

ムニ バッシッタ シマ バッシルン。

シマ バッシッタ ウヤ バッシルン。

（言葉を忘れたら、故郷を忘れる。

故郷を忘れたら、親を忘れる。） 一竹富島のことわざ

#### 参考文献

- 川越めぐみ（2012）「未来に残す被災地の方言」『文化庁委託事業報告書 東日本大震災  
において危機的な状況が危惧される方言の実態に関する予備調査研究』東北大学大学院  
文学研究科・東北大学方言研究センター
- 木部暢子（2011）「言語・方言の定義について」『文化庁委託事業 危機的な状況にある言  
語・方言の実態に関する調査研究事業 報告書』国立国語研究所
- 木部暢子・山田真寛（2011）「消滅の危機の程度にかかる判断基準・根拠について」『文化  
庁委託事業 危機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究事業 報告書』国  
立国語研究所
- 木部暢子・盛思超（2011）「人口推移から見る危機的な言語・方言」『文化庁委託事業 危  
機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究事業 報告書』国立国語研究所
- 木部暢子・山田真寛・下地賀代子（2011）「危機の度合いの判定」『文化庁委託事業 危機  
的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究事業 報告書』国立国語研究所
- 小松代融一（1988）『岩手方言研究史考・続編』私家版
- パトリック・ハインリッヒ&松尾慎（2010）「東アジアにおける危機言語とその研究」『東  
アジアにおける言語復興—中国・台湾・沖縄を焦点に』三元社
- Crystal, David (2000) *Language death*. Cambridge: Cambridge University Press. デ  
イヴィッド・クリスタル『消滅する言語』斎藤兆史・三谷裕美訳、中央公論新社、2004  
年
- Fishman, Joshua A. (1991) *Reversing language shift: theoretical and empirical  
foundations of assistance to threatened languages*. Clevedon: Multilingual Matters  
Ltd.
- Krauss, Michael. (1992) The world's languages in crisis. *Language* 68. 4-10.
- Nettle, Daniel and Suzanne Romaine (2001) *Vanishing voices*. Oxford: Oxford University  
Press. ダニエル・ネトル／スザンヌ・ロメイン『消えゆく言語たち—失われる言葉、  
失われる世界』島村宣男訳、新曜社、2001年
- UNESCO Ad Hoc Expert Group on Endangered Languages (2003) *Language Vitality and  
Endangerment*. Document submitted to the International Expert Meeting on UNESCO  
Programme Safeguarding of Endangered Languages.
- [ <http://www.unesco.org/culture/ich/doc/src/00120-EN.pdf> ]



## 第2章. 被災地の言語意識

---





# 被災地住民の言語意識

大野眞男・齋藤孝滋・大橋純一・田中宣廣

## 1. 陸前高田市 言語意識の聴き取り 1

【司会】 被災される前と比べて、ご家族の方と方言を使ってお話になる機会というのは減りましたか、増えましたか、あるいは変わりませんか。

【男性A】 変わらないですね。

【女性B】 同じですね。

【女性C】 ええ、前も今も、方言で話をするのがないんです。

【女性D】 共通語のほうが多いですね。でも、母と会ったときとかは、方言が自然

【司会】 お母さまは。

【女性E】 あります。でも、方言はあんまり使わなくなってきました。こっち（高田）に来ると安心します。〈注〉被災後、仙台でお暮らしになっている。〉

【司会】 被災される前と比べて、顔見知りの方とか、ご近所の方と方言を使ってお話になることってというのは増えましたか、減りましたか、変わりませんか。

【男性A】 変わらないね。会話そのものも全然変わんないですね。ええ。

【女性B】 ただ、津波のあと、それぞれ散り散りばらばらになってしまったので、ただ会えばね、やっぱり、「あやっ」っていう感じで方言を使うことが多いですけどね。会う相手が少なくなってしまったということですね、近所がなくなったということですね。

【女性C】 ええ、生徒がよく訪ねてきて。で、昔、学校の中で生徒同士で話をしていたその言葉はね、まだ生きてて、その子どもたちが来たときは、その生徒同士の話に、まだ方言が生きているなど思うことはあります。

【女性D】 近所はいままでと変わらないんですけども、やっぱり買い物に行ったときとか、知り合いに会ったときは、やっぱり懐かしさから方言とか、同級生とかに会えば必ず方言になります。うん。かえって同級生に会ったときに、すました言葉でしゃべったりすると、なんだってことになるので。うん。そういうときは自然と、子どものころの話していた言葉が出てくるように思います。

【司会】 仙台におられて、いかがですか。ご近所の方と仙台でお会いになることなんかは。

【女性E】 あんまりないんで。ええ。でも、この間、盛出身の人に声掛けられて、楽しかったです。

【女性D】 ヘルパーさんね。

【女性E】 あ、ヘルパーさんが友達になって、その人が矢作出身なので、そうすると二人では、あの、方言だけで話します。ふふ（笑）。

【司会】 仙台に行かれる前と比べると、方言でお話しになることは減ってしまいましたか。

【女性E】 全然減りました。こっちに来ればこうして、話すにいいけど。

【司会】 被災される前と比べて、外部の方とお話しになることは増えましたか、変わりませんか。

【男性A】 ああ、確実に増えましたね。こういう何つうかね、仕事が多くなったんで、ものすごく。あの、取材とか、あとは、まあ支援してくださる方とか、ものすごくこういう接触が多くなったんで、その分は確実に増えましたね。

【司会】 そういう方とお話しされるときは標準語ですか。

【男性A】 あ、そうですね。できる限りというかね。どっから来るか分からないので、方言だとそれこそ通じないんで、ある程度は少しでも標準語に近い言葉で話す努力はしています。

【女性B】 そうですね、何だろう。思いがけないとき、こう方言が、こう出たりして、

それは何となく多くなったのかなって思いますね、逆に。だから、それだけの津波のね、あのときの思っているのが、こう、残っててね、そいな言葉に出んのかなっていうのを一つ感じていますね。

【司会】 外から来た私みたいな外部者とお話しされるとき。

【女性B】 あ、そういうときは、やっぱり違いますね、ある程度。そうですね、自分ではうまく切り替えているかどうかは分かりませんが、やっぱり標準語でしゃべんなきゃ通じないのかなって感覚で。

【司会】 増えましたか、そういう機会は。

【女性B】 支援の方たちが結構みえますね。そういうときは、そうですねえ。

【女性C】 共通語でしゃべってきたし、私自身の世界は広がってはいるんですよ、いろんな人たちとの出会いがね。でも、それで方言がどうこうということはないんですね。

ただ、方言について、子どもがね、家庭の中で方言に接するということがなくなっているんじゃないかと。とてもきれいな言葉で話すんですよ。幼稚園に通ってる子も、保育所に通ってる子も、みんな同じようにテレビで知った言葉というかね、それがすごい私には悲しいんですね。どうしてそういう言葉だけで、子どもたちが話すようになってしまったんだろうってね。こうしたら、家庭の中で方言を身に付けるという、そういうチャンスはもうほとんどないだろうと。そうしたら、どこで方言を教えていったらいいのかなって。

これは教師の立場が抜けないのですが、それはやっぱり機会を見つけてね、方言を子どもたちに使わせて、それと共通語と両方使える人間にならないといけないと思いますね。

【女性D】 そうですね、やっぱり支援の関係で、名古屋方面から支援されたりとか、ありますのでね、やっぱりそれはあります。そのときは、やっぱり共通語ですね。

【司会】 お母さまは、いかがでしょうか。外部の方と接するというよりは、もう外にお出になってしまっているのです、仙台では共通語でお暮らしですか。

【女性E】 なるべく、そうしています。

【女性D】 ふふふ(笑)。つらいね。

【司会】 ストレスたまりませんか。

【女性E】 ふふふ(笑)。あんまりおしゃべりする機会がないので。

【司会】 誰かとお話しされる機会が減ってしまいましたか。

【女性E】 前より減りました。友達とどこに行くと、まず、方言でそのまま。ちょうど

同級生がおりますから、そこに行くが一番気安いです。

【女性D】 いままでがね、すごい、あの、集会所みたいだったんですよ。だからね。

【女性E】 いつも、いつも、人の出入りが。

【女性D】 人の出入りが多かったんで。

【女性E】 多かったんだ。

【司会】 そうでしたか。じゃあ、寂しくなっちゃいましたね、ちょっとね。

【女性E】 でも、まず、あっちに行っても友達もありますから、それ、少しはいいですけど。

【司会】 今度は、言葉のこともそうなんですけど、伝統行事とか、お祭りがそろそろ復活してきましたよね。例えば福島県だと、「相馬野馬追」、陸前高田はそういう伝統行事、お祭り、復活していますか。

【男性A】 ええ。復活している部分と、できない部分と。でも、おかげさまで、高田のほうはね。

【女性D】 うん、そうだね。

【女性E】 七夕がね。

【男性A】 七夕が今年、山車が半分。あとは「けんか七夕」のほうも半分、2台復活。まあ支援をいただいてね、復活してにぎやかにやりましたけどもね。あとは、地方でもこういうようなお祭りがあるんですけども、それらはなかなか、まだまだ復活までには至らないのが現状ですね。

【司会】 これからそういうお祭りを、どうしていったらいいとお考えになりますか。

【男性A】 やっぱりなくすっていうことは、あのね、まあそういう神様のあれですから、ないと思うんですけども、仮設もある程度落ち着かないうちは、なかなか難しい部分もあるんじゃないかなっていうふうに思うんですね。

【女性B】 やっぱりこう、心のよりどころですもんね。そして、そこにこう集まってくる顔が、昔のつながりを持っている人たち、懐かしさなんですよ。で、そこで、ああだったなあ、こうだったなあっていう、あの独特の雰囲気はやっぱり消したくないもんね。うん。

【男性A】 さっきの「お天王さま」も、そうですね。

【女性B】 そうだもんね。

【男性A】 ああいうお祭りはやっぱり、伝統のお祭りはね。

【女性B】 大変だけれども。

【男性A】 なくしたくはないです。

【女性C】 七夕なんかがあるときは、帰ってくるんですよ。昔、太鼓を叩いたり笛を吹いたりした子どもらがね、大人になって帰ってくる。そういうことで、ふるさととつながってるんだなって、すごく思いますね。それがこう、子どもの代にも、たぶん流れていくんじゃないかなっていう気がして、そういうところには希望が持てるんじゃないかと思うんですね。

【女性D】 そうですね、やっぱり私はいま、竹駒町っていうところに住んでいますけど、やっぱりお祭りっていうと、高田町の出身なので、やっぱりふるさと、生まれたところのお祭りのほうが、こう、気持ちとして、ずっと生きているというところがあるんですよ。だからやっぱり、それは復活してもらって、続けていってほしいなと思います。竹駒町だと、もう6年にいっぺん、本当は12年祭なんだんですけど、間を取って6年に仮祭りみたいな、ちょっとした、内容は同じですけど。そっちよりは、やっぱり私は高田のほうのお祭りのほうに惹かれてしまいますね。

【司会】 お母さまは、お祭りをする高田から離れて暮らしていらっしゃるんですけど、お祭りのときいらっしゃいましたか。

【女性E】 来たくても来られないので、テレビで見て泣いていました。

【女性B】 ふふふ（笑）。んだすね。

【女性E】 懐かしくてね、何となく音がこう、どんどん、どんどん胸に来るからね、涙が出て。息子が「高田、映ってだ」って言われて、見るんだけどね。たまに仙台にもニュースでいくと、そんなのを見ると涙が出て駄目です。

【司会】 言葉のほうに話を戻しますが、地元の方言、地域の言葉について、どうお考えでしょう。お好きですか、愛着を感じますか。

【男性A】 まあ、私は好きですね、やっぱり愛着。それこそよその人たちが聞くとかなり乱暴のように聞こえる場合もあるみたいですけども、やっぱりこの町の言葉っていうのがね、好きですね。

【女性B】 大好きです。ならばならそれでしゃべりたいの。(笑)

【女性C】 ええ。耳慣れてはいますよ、四十年もここに住んでるから。でも、使えないということ。なんか、こういう人と一緒にいるときに、(笑)劣等感みたいなのが感じますね。なぜ、この土地で方言をね、使えないまんまに暮らしてきたんだらうって。子どもたちはね、みんな使えるんですけども。〈注〉盛岡のご出身である。〉

【女性D】 そうですね、普通、話しているときは忘れてはいるんですけど、やっぱり土地の人とだと自然と出てくるんですね。うん。それでこの間、こういうお話があるからって、いろいろな面白い言葉なんか周りの人に、「ほんだべっちゃ」とか。(笑) なんか、「はせはせ行け」だの。

【女性B】 ふふふ (笑)。

【司会】 はせはせ行けというのは。

【女性B】 はせはせ行け。ははは (笑)。

【女性D】 ははは (笑)。

【女性E】 急いでか。

【女性D】 急いで。

【男性A】 走って行け。

【女性D】 急いで行きなさいというときに、はせはせ。はせはせ歩けて言うんだっけどね、はせはせ行けとか。あとは、バスに乗ってて、笑い話じゃないけども、「次へおづっから」って。ははは (笑)。降りますということをね、「おづる」と言うとかね、そういう話が次から次と出てきて、ああ、こういう言葉もあったったなあって、ほんとに使わなくなったなあっていうふうに、思ったり懐かしんだりしました。

【司会】 お母さんはどうでしょう。高田の言葉。

【女性E】 仙台の地元紙にね、いつも方言がかかっているんです。その「はせはせ行け」みたいだね。それでときどき、ああ、ほんと、こんな言葉もあるなあ、あんな言葉もあるなあと思ひ出して懐かしくなります。

【司会】 言葉も文化財だっという考え方がありますが、どう考えられますか。

【男性A】 そのとおりだと思いますね、やっぱりね。ええ。方言メモ帳をつくったのもその一つなんですけども、なんとかやっぱりね、こう、少しでも残していきたいなという

思いもあってつくったんですけどね。ただこのまま、こう渡しても、すぐそのまま方言と  
いうので話せないんですけども、それでもやっぱりなんかね、言葉として、こう、実際、  
売れるものがあればなという。〈注〉男性A氏の経営する印刷会社で発行している方言  
メモ帳について語っている。陸前高田の方言がイラストともに描かれている。〉

【司会】 買っていくのは、大人ですか、子どもですか。

【男性A】 いろいろですね。結構年配者の方も多いですけども、子どもたちは、かわい  
いとかね、面白いとかって買っていく人もいる。だいたい、こう、売るときに、方言の話  
がそこでこう。これ1冊買うのもしばらく、30分ぐらい話をしています。

【女性D】 そうですよ。

【男性A】 みんなで、話語りしながら、こう、方言の話が出てね。

【女性B】 ああ、なるほどね。ああ。こうすればね。

【司会】 だいたいどこら辺まで広がっているんですか。市内ですか。

【男性A】 販売しているのは市内ですけども、発送もしていますし、ホームページに載っ  
けていますので。あとは、この間、平泉とかもあれさ行っても販売、ちょっといろいろな  
イベントがあって、したんですけども、やっぱりそこでもいろんなこうね、話題になって。  
ははは（笑）。

【女性B】 方言には、やっぱり標準語に勝る良さがあると思っているんですよ。方言と  
いうのはね。まったくその場に、こう、ぴったりした意味合いを持っているという意味か  
ら、やっぱり消したくないですね。消されたくないっていうんですか。ははは（笑）。

【男性A】 気持ちがこう入った言葉っていうのはね、本当にこう。

【司会】 昔は、学校では方言を使わないようにって指導したようですね。

【女性C】 そうなんですよ、共通語を使うように指導しろと、国語の教師なんか言わ  
れ続けて。でもいまは、指導しなくてもしゃべるんですよ、共通語。ほかから情報が入っ  
てきているから。逆に、方言も使える子どものほうがいいんですよ、本当はね。どうし  
たらいいのか分かんないけど。

【男性A】 私、高田高校のころはね、赤崎とか、いろんなところから集まってくるじゃ  
ないですか。あえて自分たちの方言をね、お互い、こう、「おらほで、こんなのがあるぞ」  
と。

【女性B】 ああ、なるほど。



【男性A】 話をしてね、方言で会話をしたったですね。

【女性C】 昔はでしょう。

【男性A】 わざと、高校のころには。

【女性B】 いや、なんかね、いま私、横田小学校の仮設にいるんですけど、8時になると、「おはようございます。横田小学校、何々放送部です」って、すんごくきれいな、言葉が。まるで、「あんた、東京弁っ子だな」って私言ったんですよ。

【女性C】 なまりがないのよね、ここの子どもってね。

【女性B】 ねえ、ほんとに。いまみんなそうなんだかもしないね。先生方が、そういうふうにはら気を付けて、うん、共通語を。

【男性A】 テレビですね。

【女性D】 うちもね、主人が国語の教師だったので、そして転勤していきますのでね、家庭内では標準語を使うようにしてたんですね。だから、息子がまだ小学校のころ、うちではお父さん、お母さんって、普通にちゃんとした標準語っていうか共通語で話をしてるんですけど、友達が来ているときにね、ある日に、「おらのかあな」とかって。〈注〉大槌町に赴任しているときの話として語っている。〉

【一同】 ははは (笑)。

【女性D】 外で誰か言ってるんですよ。なんだかうちの息子の声に似てると思ったら、「かでろ」とかね、大槌の言葉でね、うん。「おらのかあな」って言われたときは、がくんとして。そして、そのあと、どうかなと思ったら、普通に「ただいま」って。「ぼくね」とかって。ははは (笑)。ちゃんと切り替えて。切り替えてね、友達とのコミュニケーションを取ってたんだなあと思ってね、えらいもんだと思って。

こちらは大槌弁ではしゃべれね。べつに拒否して使わないっていうんじゃないんだけど、似てるんですけども、沿岸なのでね。でも微妙に違うところがあって、だから余計こう使いにくっていうか、使いづらっていうかね。それで、言えなかったんですけど。

【女性D】 ええ。だから、やっぱり子どもたちのあれは、すごいもんだなあと思います。こう、自由に・・・。

【女性D】 ええ。その土地になじまないと、やっぱりいまのあれじゃないですけど、いじめに遭うかもしれないし。

【女性E】 今度高田さ来てから、今度大槌なまりが出て、いじめられて。

【女性D】 ふふふ（笑）。

【女性E】 かわいそうだったもんね。なまりがあるからね。

【女性D】 微妙なんですけどねえ。

【男性A】 釜石から変わってきますよね。

【女性D】 ちょっとね、こう、微妙にこう違ってくるんですよ。

【女性B】 そうだね。

【女性D】 気仙って言ってもね、大船渡の方言と高田の方言は違いますしね。

【司会】 それでは、ご自分のお子さんやお孫さんにも、高田の言葉を受け継いでほしいとお考えになりますか。

【男性A】 そうですね、まあ、ちょっと難しいと言えば難しいんですけども、いま言われたように、やっぱりこう、使い分けっていうのがね。やっぱりここへ来たら、地元へ来たら地元の言葉で。たぶんいまの子どもって器用だから、それはできると思うんですけど、向こうへ行ったら、まず共通語でというような感じで。

【女性B】 私はどっちかっていうと、まず、(方言を) 使うほうだから、子どもたちが、「うんっ」って思えば、それも出るんだろうっていう感覚でいますけどね。あ、母ちゃんがあんなこと言ったら、あんどき、例えばね、自分もそういうふうに出て来るのかなって。あえて、うん、ただ、聞いたことありませんけどね。慣れてっから子どもたちも、私の言葉に。

【女性C】 ええ、やっぱり両方使えるようなね、そうでないと土地に生まれた甲斐がないわけでしょう。で、私は、いまでも盛岡弁は懐かしいですよ。で、ここの言葉よりも盛岡弁のほうがずっと好きなんです。ふふっ（笑）。柔らかくてね。まあ、それは人格に関係ないことですから、ふふふ（笑）。いいんですけど。やっぱり（方言と共通語の）両方だと思いますね、どっかで教えたいです。

【女性D】 そうですね。前みたいに、かたくなに、ふふふ（笑）。立派な言葉（共通語）を使えとは言いません。

【司会】 でも、いまの子どもたち、どんどん方言使えなくなっていますけども、どうしたらいいでしょうね。

【女性D】 ああ、そこは難しいですよ。うん。

【司会】 やっぱり、方言メモ帳ですか。

【女性D】 ははは（笑）。ほんとにこういうのを見ると、「ああ、けなりな」とか。

【女性E】 使ったんだかね。

【女性C】 なくしたくない言葉を教えておく。

【女性B】 「おだづね」って使うってが。

【男性A】 完璧にやっぱり方言を使いこなすのは、まあ私たちでも、たぶんどきないと思いますけどね。

【女性B】 うんうんうん、そうですね。

【司会】 では、お孫さん方に、そういう言葉をしっかりと受け継いでもらいたいとお考えですか。それとも、もうご時世だから仕方がない。

【女性E】 仕方がないと思います。

【司会】 被災されてから、言葉のことで、ご苦労なさったこととかありますか。例えば、外からいろいろ支援の方が入ってきて、この高田の言葉が分からなくて苦労したってことは、だいぶ私ども聞いているんですけども、高田の方から見て、支援の人たちとのコミュニケーションはどうだったでしょうか。

【男性A】 私は、特に不自由はしなかったですね。はい。そういう経験もないですし。まあ、ビジネスっていうか。ははは（笑）。まあ、いろんな取材とかが来られてもね、それなりには。通じるようには話はしているつもり。

【女性B】 私も、特にはありませんでしたね。

【女性C】 ええ、全然困りません。

【女性D・E】 そうですね。

【司会】 それから、「がんばっぺし、陸前高田」のような、方言で元気の出るような言葉を使ったグッズとかは、どうお感じになりましたか。

【男性A】 それこそ高田の方言っていうのはこうなんだっていうことをアピールするにはいいんじゃないかなと思いますね。やっぱり、いろいろご支援をいただいてね、せっかくこの町に来て、この町の文化っていうのを知って帰っていただくほうが、来ている方々にもたぶんいいんじゃないかなっていうふうに思うんで。ここにボランティアで、瓦礫とか片付けに来て、被災前の陸前高田の写真集を買っていかれるんですけども、なんで

かっていうと、自分たちが来てね、どんな町をこう片付けていたのかって分かんないって言うんですっけ。それで、前の写真が入った本をほしいということで買っていかれる方が多いんですね。

で、それと同じように、やっぱり、あ、この町って、こういう言葉が、こんなふうに使われているんだなっていうのを、一つでも二つでも覚えていけば、自分たちがこういう町に行って働いてきたんだよっていうのをね、伝え得ると思うし、そういった意味でもいいと思うんですよね。

【司会】 「ちばりよ」なんていうのもありましたよね。それは沖縄の言葉だと思えますけどね。あんなほかの地域の言葉で、頑張れよと言われるのはいかがでしょうか。

【男性A】 あ、べつにいいんじゃないですかね。

【女性B】 いいじゃない。一時期、こう言われましたね、友達なんかから、「いや、被災した人たちが精いっぱい頑張ってたから、頑張れよって言う言葉は禁句だって」一時期もありましたよね。でも、高田から発信しているのは、「がんばっぺし」のシールなんですよ。ああ、これで本当に頑張るっていう意味が、前に流れた禁句になっていた言葉と、ああ、ほんとの頑張るっていうのはこういうことなのかなあって、被災地から発信したあの言葉の意味が分かってもらえたんじゃないかなあって。

【男性A】 あれ、たぶん自分たちが「がんばっぺし」っていうことだと思うんですよね、ここにいる人たちが。

【女性C】 ううん。そうなのね。

【女性B】 うん。そうそう。ほら、その人たちにね、頑張れ、頑張れって言えないと。「がんばっぺし」なんて言えないっていう、そういうときあったよね、一時期。だけど、言いやすいんですよ、「がんばっぺなあ」っていう。

【男性A】 がんばっぺってね。

【女性B】 ねえ、がんばっぺなあって。

【男性A】 なんだら、がんばっぺって。ふふふ（笑）。

【女性C】 やっぱり迫力がありますね、ここの「がんばっぺし」っていうのはね。頑張ろうねとか、頑張るべなっていうよりは、力がこもっているような感じがして、そういう使い方をしたときはいいなって思うんですね。

【女性D】 「がんばっぺし」っていうのは、個人にじゃなくて、頑張ってるんだねって

いうの。うん、さらにもっともっと頑張れっていう意味じゃなくて。

【女性C】 一緒にがんばろうね。

【女性D】 一緒にがんばっぺしっていうあれでね、私は、ああ、ぴったりだなあってふうに思いました。

【女性E】 私も、何となく親しみがあって、ああ、お互いみんなこう思ってたなあって、そう思って、私好きです。

【司会】 最後の質問なんですけど、言葉の復興ということに関心を持って支援するような取り組みをさせていただいておりますけれども、そういう活動についてどうお考えになりますか。

【男性A】 言葉に関しては、どういうふうな形で残そうしているのかっていうのは、たぶんなかなか難しいと思うんですね。その土地の人たちが、やっぱりこういうふうに俺たちの言葉を残そうよっていう活動をして、その支援をしてもらうのであればいいんですけども。

【女性B】 こんなときだからこそ出てくる方言というのがきくとあると思うんですよ。普段には使っていない、どん底じゃないですか。どん底たって、1年半もたったんですけど、あの瞬間にね、あの瞬間にこう出た言葉っていうのは、方言のようなのがいっぱいあったと思うのね。

【女性C】 私は、市の広報をテープに吹き込んで、視覚障害者に毎月2回送ってやるボランティアをもう16、17年続けていて。あの日に、目の見えない人たちがどのように苦労したかをあとの集会でね、話してもらったんですよ。そしたら、そのとき何を一番思ったのって言ったら、生まれたときから見えない男の人ですけども、60歳過ぎている、「私は声がほしかった」って。

【男性A】 ああ。

【女性C】 そのときにこう、逃げているときにね、水の音と周りの人たちの騒音は聞こえるけども、「頑張ってねって、一緒に逃げようね」っていう声はあまり聞くことができなかったって。それを一番ね、思って、人間がこう、そのときに口から出す言葉のいかに重いものかということ、私たちも再認識させられて。それで、どうしてもこのテープの仕事はやめられないなって、そのときあらためて思いましたね。どんなに言葉をほしがっ

ている人たちがいるか。ええ、見えないだけにね。だから、そういう意味で、言葉の重みというのをね、感じたから、これは言葉を使って本当にいい仕事を続けるということは、本当に大事なんだなって思いますね。

【女性D】 そのほかにね、震災が3月でしたけど、もう6月にはね、私読み聞かせもしてるんですが、小学校のほうから依頼があってね、すぐに始めてほしいって、子どもたちがほんとに学校の校庭もみんな奪われて、竹駒は被災しなかったんですけどもね。その中で活動してるので、すさんでいる子どもたちに普段の生活を取り戻してあげたいので、読み聞かせをすぐに始めてほしいって言われたんですけども、そのときに一番困ったのが本、図書館も被災しましたから。

それから本を探して歩きました。大船渡の図書館も、被災者がその建物に入って避難してましたから図書館も使えなくて、陸前高田にも本は来てたっただけですけど、人手がなくて、ただ山のほうの学校にそのまま置かれてあったんですけど。

それで、どこから持ってきたかっていうと、宮城県の仙台まで人づてに情報を聞いて、仙台にこれくらい本が集まっているから誰にでもあげますって言われてね。そして、車で行って、あのときで600冊ぐらい、手当たり次第に持ってきたんです。それからまた再開したんですけども、置く場所もなくて、持ってくるのはいいんですけど、段ボールに入れて、今度は梅雨時で、その箱がふやけてくるしね。で、うちの倉庫に置いてたんですけども、それを広げては閉じ、広げては閉じしながら、学校には行ったんですけども。

やっぱり、子どもたちの表情が変わってきたって言われました。やっぱりその言語とか、そういう読み聞かせもそうですけども、大事なコミュニケーションになるんだなあっていうのは一番感じました。

【司会】 地域で方言を使ったFM放送があるような話も聞いてきましたが。

【女性D】 ええ、災害FMにも。で、私たちの仲間が、私もやりましたけども、岩手の民話のような。最初は全部方言、高田ばかりじゃなくて、二戸とか、県内ですので、ニュアンスが違うんですよ。高田弁で全部やれるっていうわけでもなくて、本に忠実にっていうのが頭にあって、その原稿を読んだ時点で、えっ、ちょっとこれは大変だって思ったんです。それでまあ、聞く人もこの辺の人で、まあ分かっても分かんなくても流したいのでっていうことで、あまり技術的なことは問わないという約束で放送したんです。

今、小学校の子どもたちにも、昔話の本を読んでほしいっていう要望があって、新しい

本はいっぱい出ているんですけども、それも読みますけども、やっぱり昔から伝えられているお話を今の子どもたちが知らないって。『さるかに合戦』だっつったって、何のことか分かんないとか。たまたま『鶴の恩返し』っていうのを読んだ人があってね、竹駒小学校で読んだ人があったら、そしたら、私が読んだ『鶴の恩返し』と違うって言われたんですけど、読んだあとに。だから、再話によっていろいろ違うので、やっぱり本を選ぶ、選書って言うんですが、それって大事だなあって、そのときにね、仲間同士の勉強会で話し合ったんですけども。

それでやっぱり、いろいろ違って、地域によって同じようなお話があるから、こんなふうにもなるんだよっていう、子どもにはそう話してきて。だから本の作者によって、ちょっと違って書いてあることもあるので、また勉強してくるねって言ってきたって言うんですよ。

それで私たちも、じゃあ月にいっぺんぐらいは、昔話を入れようっていう話になったんですね。だから、やっぱり先ほどから言っているような言葉、標準語だけじゃなくて、で、絵本なんかはね、大阪弁が多いんです。ちゃんと活字になって、大阪弁で出てんですね。で、それを私たちが下手な大阪弁を使って読むんですけど、耳から聞き覚えのあるように読んで聞かせるわけですけど、そんなふうにやっぱり民話の中に入っている言葉も、やっぱりこれから重視して言っていかなくちゃいけないのかなあっていうふうに思いました。

【司会】 子どもたちに高田の言葉を使うようにしてもらうには、どうしたらいいんでしょうね。

【女性C】 こういうよく分かる、昔の言葉もよく分かる方に、語り部になっていただいて。そして、子どもたちを集めてね、分かりやすく使いながら、教えていくっていうのも一つのことだろうしね。

【司会】 なんで家庭の中で方言を使わなくなってしまったのでしょうかね。

【女性C】 親が使いなくなっているからですよ。ああ、違うんでしょうかね。

そして、伝承しようという意識もあまりないんじゃないですか。

【女性D】 ないですよ。

【女性C】 外に出たときに、スムーズにこう言えるようにというほうが、大事なんだか

もしれないです、親にとってはね。

【男性A】 たぶん昔より、いま交流が多いですからね、こう外へ出ていく機会が。

【女性B】 そう。

【男性A】 交流が、要するに。

【女性C】 できないからね。

【男性A】 車とかかなんかがないですからね、いまはほら、すぐ仙台でもどこでも、ぼつと行ってね、買い物に行ってくるからみたいな感じで。だからね、交流が多いから、どうしてもやっぱり共通語にならざるを得ない状況もあるのかも分かんないですけどね。

【女性B】 家族構成がいま違っているじゃないですか。昔だったら、近所から嫁ごさ来たっつあ、婿さ来たっつあって、変える意味合い一つもないのに、つついそれで育ててしまうから、ごく普通に耳慣れたんですけど。今、んだって全国から来てんだもんねえって、私は感じますけどね。教えっぺって、教えるんじゃないくて、普段の生活の中にあっただもんね。

【男性A】 そうですね。

【女性B】 「ほれ、早くご飯けえや」とか、「何してんだ、いづまで」とかって、そういう中で育ってきてるから身に付いてる。あと、国語は勉強するだけでしたから。「だや、いいな、あの人、東京弁子だぜ」って。「どこから来たんだべえ」って言うど、製糸工場の所長の娘だとかね、そうじゃなかったですか。「ああ、あいつ、東京弁子なんだ」って。教科書のその標準語、そんなことでなくて、東京弁子って聞いたもんね。

【女性D】 みんながね。

【女性B】 うん。

【女性C】 人間が言葉を運んで歩くのよね、結局ね。

【女性B】 うん。そのとおりですね。うん。

【女性C】 だから、そこを活用すればいいじゃない。

【女性B】 ふふふ（笑）。



## 2. 陸前高田市 言語意識の聴き取り 2

【司会】 ご被災される前と比べて、言語生活がどんなふうに変ったかっていうことをおたずねしたいと思います。ご被災前と比べて、ご家族とお話をされる機会っていうのは、減りましたか、変わりませんか。

【男性G】 変化があったんじゃないですか。

【男性F】 うん。

【男性H】 言葉自体が変わったかっていえば。ううん。ただ、家族が、やっぱりね、ばらばらなってるっていうか、そういうことで言葉は、やっぱりなんぼか違うんだべねえ。ううん。

【司会】 ご家族以外に、例えば、ご近所の方とかご親戚の方と、昔のように地域の言葉でお話される機会っていうのは、どうなりましたでしょうか。

【男性H】 うん。それは、ありますよ。地域の人たちが、何人か一緒にいるから。その人だづど、まず話しかたりしたり。そんなときのほうが、なんつうだべねえ、地元の方言でしゃべってっからね、お互いに。

そういうとぎの方が、話、言葉としては出んのよな。

【男性F】 出るんだろうね。うん。

【司会】 いろいろ外部の支援の方がいらっしゃっていますよね。そういうボランティアなどの支援の方とお話されるとき、どんな言葉で話されていますか。

【男性H】 やっぱり、半標準語だべねえ。

【男性F】 ふははは（笑）。

【男性H】 体裁ええごど、語んなくちゃなんねえがらね。

【司会】 半が付くんですか。

【男性F】 ははは（笑）。

【男性H】 いや、純粹の標準語しゃべれつつうたって、しゃべれねえからねえ。

【男性F】 いや、それは、あのねえ、結構全国から、やっぱ私も今やってる仕事の関係で、いろんな人と会いますけども、こっちの言葉で言っても、相手が意味が分かんないってのがあるんだよねえ。

【男性H】 うん。あんのね。

【男性F】 うん。

【男性H】 いやあ、方言でそのまんま言ったらね、向こうの人は理解できないと思いますよ。

【男性F】 うんうんうん。それと、もう一つね、一般的にこう言ってる言葉でも、本来の意味と違う意味。

【司会】 ああ。

【男性F】 向こうが知ってる意味と、受け取り方が違う言葉がありますよね。

【男性】 例えば、どんなケースがありますか。

【男性F】 あのう、なんな、具体的に言うとねえ、今急に言われても、ちょっと分からないんだけど。例えば、あの、「なんぼ」っていう言葉、あるんだけどね。よく関西でも使いますよね、「なんぼやねん」っていう、「おっさん、なんぼや」とかって、で、「なんぼのもんじゃ」っていう意味があつて。そういうニュアンスと、この辺でも、「なんぼだべ」っていう言葉はあるわけですよ。ずっと、共通語で言えばね、これはなんていう。

【男性H】 いくらですかだよ。

【男性F】 ま、だから、その金額だとか量だとかっていうのを測る量目の言葉ですよ。

【司会】 うん。

【男性F】 「いくらですか」ね、っていう意味があると思うんです。ところが、この辺では、「なんぼなんでもさあ」っていう言葉使うんですよ。「なんぼなんでもさあ、そりゃねえべ」っていう。ね。ずっと、それは、ちょっとニュアンス違うんですよ。いくらなんでもっていう意味なんだけども。いくらあれでもっていう意味なんですけどもね。

だから、そういう言葉のなかで、受け取り手が変にしゃべると誤解される言葉ってのは、地方の言葉で言うと、本来こっちで意味してる部分と、受け取る人が意味違って受け取る場合の言葉も、結構あるような気がするんです。調べたことはないんですけどね。だから、そうなってくると、やっぱり共通的な言葉でしゃべると思いますね。うん。

【司会】 以前と比べて、共通語、半共通語かもしれませんが、そういう言葉を使うことは多くなりましたか。

【男性H】 いやあ、もう、ほとんどそうなってるんだ。一般的に、そうなってるね。

【男性F】 うん。だから、今は、もう、ほとんど、よほどの年の人ですよ。ボランティア

アの人が来たりしても、こっちの言葉を中心に話しをするって人は。

【男性H】 うん。あれ。小学生が標準語で話ししてる時代だからね。一番大事なときなんだもんね。

【男性F】 うん。

【男性H】 そいづ、標準語でしゃべるとんの、小学生同士がなあ。びっくりしたよ。

【男性F】 いや、私は、これ、ちょっとまた話の筋が違いますけれどもね。東北弃っていうのはね、私は東京へ大学行ったときに、始めてね、カルチャーショック受けたんですけどね。地方の言葉を言って、指さして笑われんのは東北人だけでしたね。九州の人と、大阪の人、名古屋の人、平気で自分とこの言葉言って誰も笑わない。東北の人の言葉だけがね、笑われるんですね。これはね、なんなんだつつうのはね、やっぱりありましたね。で、これはやっぱりね、明治政府のね、戊辰戦争。

【男性H】 「一山百文」の影響だや。

【男性F】 「一山百文」の影響なんですよ。で、これは、やっぱり長州閥が中心となつてね、東北に対するそういった部分っていうのが、やっぱりあったと思うんですね。だから、よく東北人は無口で、真面目で、仕事をよくする。東北の人は、労働力としては最高だつて言われたんですけどもね。これはね、別に東北人が無口じゃないんでね。

【男性H】 いや。

【男性F】 自分たちの言葉しゃべると笑われるから、黙々と仕事に取り組んだんですよ。

【男性H】 この辺の言葉でさ、すごく古いかたちだかもしゃあねげつども、丁寧な言葉がね。

【男性F】 あ、あるんだよ。

【男性H】 あの、なまってしまったりさ、おかしい使い方されてるだけでもね。立派な言葉しゃべってたよね、考えてみればねえ。

【男性F】 うん。

【男性H】 「いえのごで」って、まずね、言うのは、例えば、おたくのおやじ、ね、「いえのごで」って、「あのごで、どうのこうの」って、悪口みてえに言うけつどもね。「ごで」つつうのは、考えてみればご亭主なんだもんね。

【男性F】 そうそうそう。

【男性H】 んだから、この辺はね、古い言葉で、すごくいい言葉ど、いっぺえあるよう

な気いすんだよなあ。

【男性F】 ありますね。実は「ほいど」ってあるんですよ。これ、乞食ですよ、今で言う。これはね、古文書には「乞食」とあって、読み方「ほいと」なんですよ。で、「ほいと」っていう京言葉です、これ。それがなまって「ほいど」なんですよ、東北では。そういう、これ、やっぱり藤原の影響だと思いますけど。京、都言葉が結構ここに根差してますね、それがなまった言葉として残ってることは結構ありますよね。

【男性H】 いや、俺、常々、こう話聞いててばね、ああ、これ古い言葉でいい言葉なんだべなあと思うのがあるもんな、結構。

【男性F】 ああ、あるよね。

【男性H】 先生のほうもねえっすか。

【男性G】 確かに、これは、やっぱり気仙の、その、土地。

【男性F】 気仙語んなかに、古いい言葉が。

【男性G】 そうで、内陸よりも早く、海の関係で。中央からのね。

【男性H】 いろんな文化来たんだべねえ。

【男性G】 文化が、交流があったと言われてるんですね。それで、その京言葉が、ずいぶん、その気仙語の中にあるって言われてんですよ。

【男性H】 なあに、いろいろ、こう話したのは、いろいろ聞いてみたり、考えてみっど、なあにこれいい言葉なんだがなと思う言葉つうの、ずいぶんあるような気いすんだよねえ。

【男性F】 それとね、その、今の言葉で置き換えられない言葉があるんだよね。

【男性G】 うんうん、うん。

【男性H】 うん、んだんだんだ。気仙語だよなあ。

【男性F】 気仙語よ、あれ、今の、じゃあ、これ共通語とか標準語で、じゃあどういふ言葉だつていうと、ちょっと見当たらねえわ。

【男性H】 あのさ、俺、非常に、なんつうんだべ。下賤な言葉んなつか、ちょっとなだけっどもさ。「こら、ちよすな」っていう言葉あつべつちや。

【男性F】 「ちよすな」つての。そうすつとね、その「ちよすな」がね、普通だったら触るなとか、いじるなとかつていう意味が多いだけっども。「ちよすな」つていうのは、もっともっと深い、「おなごげんどごちよして泣かすな」とかね、そういう使い方とかもあつかすべ。

【男性F】 あるある、うん。

【男性G】 うんうんうん。

【男性H】 そら、「ちよす」というのはね、触るとかなんとかばりでねんだよなあ。

【男性F】 そうそう。うん。

【男性H】 いろんな意味が含まれてんだ。

【男性F】 意味があるんだよね。

【男性G】 うんうん。

【男性F】 だから、そういうの、ある。だから、なんていうかね。

【男性H】 おら、面白い言葉あると思うねえ。

【男性F】 この間、別のところでも言ったけどね、「何々のそらが無い」っていう言葉あるんですよ。で、「そらが無い」っていうと、そらが無いっていう意味しか。

【男性H】 ああ、いきだそらねどもな。

【男性F】 ええ、「いきだそらね」っていうんですね。それから、周りで子どもたちがぎゃあぎゃあ騒ぐわけですよ。ずっと「からせつなくて、くったそらね」っていうんですね。飯食ってるそらが無いって、ずっと、このそらが無いっていうのを、どういう言葉で置き換えるかっていうと、なかなか難しいですよ。そういうね、今の言葉、われわれが通常、今、こうやって使ってる言葉のニュアンスで言えない、あれがあるんですね。

で、「いれっこすまっこ」っていう言葉あるんだけどね。なんとなく、分かるんですよ。言ってる意味はね。だけど、ほんで、それ今の言葉で言うと、じゃ、どういう言葉に置き換えるかっていうと、ちょっと、われわれでも出てこないとかね。

そういう言葉が結構あって、ましてや、今子どもたちが全然そういう昔の言葉、使わなくなるとね、使われる場面が全然なくなってくるんですよ。ずっと、そういうものが、やっぱり失われていく可能性っていうのは、やっぱりあるんだろうなと思って。

【男性H】 いや、子どもなんつうのは、ずいぶんなくなったべなあ。

【男性F】 なくなってますね、たぶん。うん。

【男性H】 うん。いや、使わなくなってっからなんだよ。

【男性F】 そうそう。で、同じ高田市内でもね、地域によってやっぱりちょっとニュアンス違う場合ってあるわけですよ。この辺で、広田のほうへ行くとね、らんせ言葉っていうのがあるんですね。「あがらんせ」っていうんですね。で、こっち方へ行くと、「あ

がらっせ」ていうんですよ。その「あがらっせ」ていうのは、うちに上がるって意味  
だけじゃなくて、ご飯を食べる、ごちそうを食べてくださいっていうような意味の「あが  
らっせ」ていう言葉なんですね。それ、広田へ行くと「らんせ」なんですよ。「あがらん  
せ」ていう言葉になりますね。

だから、この同じ市内の中でも、ちょっとニュアンス違ってきます。隣と、気仙沼とも、  
またこれ言葉がちょっと違ってくるっていうので。広範囲のエリアだけじゃなくって、意  
外とその地域によって使われる言葉っていうのは、やっぱり意味がだいぶ違ってんの結構  
ありますよね。私は気仙沼高校なんですよ。気仙沼行ったときにね、「まだだんえん」て言  
われで、全然意味分かんなくてね。これは、またいらっしやいねっていう意味ですね、標  
準語で言うと。また、唐桑行くと違うんだよね。

【男性H】 大島も違うんだ。ありゃあ、子どもなんつうのさあ、俺はよく分かんないけっ  
ども、地域性があるのは当たり前だべげんども、どのぐらいの面積が、うんっつと大きく  
広がってのと、小さくしか広がねえ言葉とあんだべげんども、やっぱり、その言葉の  
持つ意味だの何かで違うんだべかねえ、その広がりってのは。

【司会】 そんな地元の言葉は、お好きですか。

【男性H】 やあ、地元の言葉はいいですよ、やっぱり。

【男性F】 いいですよ、やっぱりね。

【男性G】 うん。うん。

【男性F】 いやあ、だから、ほら、今言ったような言葉で話して通じる人はいいんです  
よね。通じなくなってますからね、言葉そのものが。ははは(笑)

【男性G】 やっぱり、こういうものは、本当は残しておきたいんだけどね。私なんか  
も、つくづく感ずるんだけど、孫は、今度小学校1年生になるんですね。ところが、孫  
の言う言葉が、今、とても立派な言葉を言うんだねえ。

【男性H】 (笑) 標準語を話すべや。

【男性G】 標準語でね。んだからねえ、こちらもね、気を付けて言わないと「じいちゃ  
ん、何言ってた」て、言われるがらね。やっぱり、こっちさもね、この方言を使うのを  
ね、ためらうんですね。孫の教育のためにねと思ってね。できるだけ、標準語に、孫に合  
わせて言わねばというような感じで。

【司会】 お孫さんには、地域の方言を、受け継いでもらいたいとは思いませんか。

【男性G】 無理だべねえ。

【男性F】 ほとんど無理に近くなると思いますね。だから、やっぱり、方言はやっぱり文化なんですよ、その地域のね。それを残すっていうことであればですね、今の時代ですから、やっぱり、まず言葉として残す。録音する。

その文章ってのも、高田にも昔話とかって、たくさんあってですね、文章としては残ってるんですね。ただ、書いた文字はニュアンスが伝わらない場合があるんです。表現できない言葉ありますよね。その、さっきも言いましたけど。それを残せるのは、録音なんですね。

んだから、やっぱこれはね、今お年寄りの方が、まだ90歳以上の方で、健在の方で、そういうことできる人いたらですね、やっぱ、そういう人、昔話なりを読んでもらって、こっちの言葉でしゃべったものをね、残しておくのが、最もいい方法じゃないかなと思うんです。

この辺の昔話を老人クラブがね、発行した本なんかもあるんですよ。やっぱし、現代文、結構入ってますよね。じゃないと、読めないんですよ、意味が分かんないから。

だから、やっぱりね、それとこの、文章っていうか文字で表されない、なんかニュアンスとかっていうの、結構言葉にあるんだね。だから、それはやっぱり直にしゃべったやつを、何か録音しとくのが一番、まずね、失わないで、まずどっかに証拠として残ってるっていうのが必要だと思いますね。

【男性H】 んだべねえ。おらも、なんつうんだべなあ。昔のね、いろんなことを、話聞かされた席で、あれ第一次るとき（市史編纂のための調査を指している）、調査の対象になられたような人たちの年代の人たちの話、よく聞いだもんだが、昔はほれ、山ん中さ入って、ずっと生活したような人たづ。

【男性F】 はいはい。

【男性H】 ほれ、木挽（こびき）だとかとかさ、炭焼きだとか。ああいう人たづの、なんつうだべなあ、風俗とかやり方とかね。山ん中さ入って、ろくなもの持ってかねえで、山ん中で寒いとき生きてだんだからな。

【男性G】 うんうん。

【男性H】 あんなの、そんなの一回聞くのにね、そんな、年寄りの人たちだから、いろ

いろ話聞いたんだけどもっす。その人たちの言ってた言葉なんかも、やっぱなんぼか違うんだよなあ、今思いだしてみれば。あんなの、もったいねがったんだよなあ。

【男性F】 んだんだよねえ。

【男性H】 消えてしまってたもんなあ。

【男性F】 うん。それは、やっぱり、何らかのかたちで残していく必要性はあると思いますね。うん。

【男性H】 うん。あんなの、話、録音したらえかったべなあ。

【男性F】 ははは（笑）。

【男性G】 うん。

【男性H】 いや、ほれ、おらほで、素朴に疑問を持ってさあ。だいたい、山さ入ってって、あんな、米と味噌ばり持てれば、山で生きてぐにいいづんだよ。いやあ。ほれで、俺なんか、山さ入ってったって食うものねえべっちゃあ。食うもの、いろいろあるづだっけもなあ。

【男性F】 うん、まあ、んだんだべね。

【男性H】 昔の人たちの話聞くと。

【男性F】 うん、うん。

【男性H】 ああいう話つつうのね、本当に聞いてかったねえ。

【男性F】 だから、変な話ですけどね、今回の震災で、被災した人、全壊になった人。まあ、私はうちはなんともなかったんですがね。ただ、電気が来ない、水が来ないっていう生活を地域ではやったわけですよ。そうすると、生活の生きる知恵、これはね、今の話じゃないけど、われわれ世代から上の人間の方があるんですよ。

で、今の若い人、ご飯炊けないですよ、電気釜じゃないと。けども、そういう部分は、昔の人たちは、お母さんが、ちゃんと釜でご飯を炊くときの水加減の見方とかね、そういうこともちゃんと教えてくれてたし。んだから、そういう部分っていうのが、今言った話は、そういう生きるためのすべを、やっぱり昔の人の語る中にね、結構あるわけですよ。それは、やっぱり人間としての基本的な部分ですよ。

んだから、それらも含めて言葉自体も、やっぱり残しておく必要があるんじゃないかなっていう感じ、今回、つくづく思いましたけどね。うん。



### 3. 大槌町 言語意識の聴き取り 1

【司会】 ご家族と方言を使っておしゃべりになる機会っていうのは、昔と比べて増えましたでしょうか、それとも減りましたでしょうか。

【女性A】 少なくなっただね。

【女性B】 減っただね。

【女性A】 うん。お嫁さんだち都会から入って来るとね。

【司会】 でも、昔ながらの方々としゃべるときは。

【女性A】 そうそうそう。そのまま出てしまうんです。

【司会】 じゃあ、使い分けることですかね。今の若い人たち、例えばお孫さんとかとお話しされるときは大槌弁ですか、それとも共通語。

【女性A】 うん、やっぱり共通語使わないと。

【女性B】 孫がね、言葉がきれいなのさ。だからそれをね、普段の言葉で言うと、「何」って言われる。

【女性A】 お母さんたちにおごられるもんね。「いらね言葉を聞かせんな」って言うの。

【女性B】 言葉ね、それね。

【女性A】 うん。いらぬ言葉でないのね。私たちはちっちゃいときから使ってる言葉なんだけど、お嫁さんにすれば、「変な言葉を教えるな」っていう言葉を言うのね。教えてるわけでないんだけど。

【女性B】 「テレビのせいなんだかね」って言う。

【女性A】 やっぱりそういうのがいっぱいあるね、うちなんかいると。(孫が) 3人もいるんだけどさ。「ばあちゃん、言葉使い気をつけて」って言われる。だから加工するこどにしてね。学校では、面白がって言うらしいのね、その孫にすれば。ばあちゃんが言ってること、その、みんなは知らないから、喜んで。「そんなごと教えんな」って言ったってね。

【男性A】 若い嫁さんがね。

【女性A】 だけど、その孫にすれば、それを学校どが幼稚園に持ってって、みんなに受けるのがうれしいがら言うのね。うんうんうんうんうん。

【男性A】 おら家の孫もね、娘の孫なんだべし、お風呂さ入れるおら家のばあちゃんがシャワーで頭流してくれて、「こまれ、こまれ」てしゃべって、「こまれ(前に屈むの意)」っ

て言われた孫は、「お母さん、どうやって困ればいいの」って、これだもんね。（笑）

【女性A】 こないだも、そんな話して笑ったね。

【男性A】 うん。そういう状態だものね。子どもの服装からね、言葉から、田舎と都会とは同じになってしまってから。

【女性A】 ううん。そうなんですネ。

【男性A】 ばあちゃんだちと、うんと格差あるわけですね。

【女性A】 やっぱり孫に対してどか、そういう人たちに対しては、こう気いつけるけどね。孫に特にだね。ええ。

【女性B】 気いつけねあなんないね。今4歳だけど。

【男性A】 （被災後、仮設住宅等により地域内での混住が進んだ状況について）その部落、部落で言葉が違いますからね。言葉がね、違うからね。

【女性A】 そうそう。

【女性B】 ちょっとずつ離れたんだで。

【男性A】 下のほうは違うすね。ある程度、大槌町の町民とする共通点はあるけれども、微妙に言葉で違うんですもの、これ。

【司会】 ああ。

【女性A】 違うね。

【男性A】 一般、普通に違ってます。地域性を持った言葉、持ってるんです。

【女性A】 うん。

【男性A】 ここはここ。各地区。それで通じないわけではないんですけどね。どこか違うんです、やっぱり。

【女性B】 その共通の人の言うごと分かりません。

【女性A】 分かりません。

【男性A】 ばあちゃんはね、山のほうだから、出身さ、金沢のほうから。そいつもちょっと違うんだけど、それも大丈夫、会話が通ずるけれども。どっこもそうだったどね。

【司会】 おばあちゃんは、お孫さんとお話するときどんな言葉使いますか。

【女性A】 うん。まだ若いばあちゃんどか、60代前半のばあちゃんだちに対しては、「ば

あちゃん、そんな言葉使って駄目だから、ちゃんとした標準語を使ってちょうだい」って言うけど、もう、こう年取ったばあちゃんたちに対しては、わけの分からないこと言っても、孫に対してもかわいばあちゃんだからさ。「駄目だよ」って言葉は使わない。やっぱりそれもある、あります。うん。若い人たちど年寄り、混じってね。

【司会】 地元の大槌弁って、皆さん好きですか、嫌いですか。

【女性A】 大好きです。(笑)

【司会】 方言ていうのも文化財だと思ったこと、おありになりますか

【男性A】 その、文化財ていうものが、後世にどのようなして残していかなければならないかってごどで、保護する、審議したりされる。

【女性A】 でも、物どかなんかよりも、言葉ていうのが一番大事でない。なくなってしまうど、だんだん、年代がたつと。見でぐど、物は残ってれば残ってるけど、この言葉どがそういう文化財ていうのは残らない。なくなる可能性あるでしょう。だからそっちのほう、私は大事だと思うの。

【男性A】 昔の古い家なんかをみんな新しくしては、壊してしまうでしょう。

【女性A】 うん。

【男性A】 そうせば屋根裏にあった古いものを、いろいろなげてしまう。

【女性A】 言葉もだんだんなくなっていくような気がするのね。だからその言葉のほうど、なんとなく大切でないかなと思うの。だっていっぱいありますよ。ノートなんかを書いてみるんですよ、私も。方言と今の言葉。すつとね、一生懸命家族中でね、すつといっぱいありますよ。

【男性A】 普段使っても、聞き慣れない方言でも、そういうの、いっぱいあるんですよね。

【女性A】 うん。いっぱいある、いっぱいある。

【女性A】 家族中で調べて、いっぱいあるの。で、子どもたちも一生懸命探そうとするんですよね。

【男性A】 よぐ、草の名前でも、花の名前でもね、一般的に使われてる名前どね、それをこの地元の言葉で言うてる花の名前もあるしね。

【司会】 震災があったときに、「がんばっぺす大槌」とか、そういう方言使ったステッカー、いっぱいできましたよね。ああいうのご覧になってどう思いましたか。

【女性A】 頑張ろうっていうのに、力を入れた言葉が「がんばっぺし」、って言う感じで私はとらえますよね。この大槌だと、頑張りましょう、それに少し力を入れたのが「がんばっぺし」って言う感じの言葉なんです。よ。だから、ああいう言葉を使って、気持ちが出ると思います。

【男性A】 お互いのね。頑張りましょうやってやつね。「頑張ろう」より……。

【女性A】 んだがら、ただただ、その、その方言が役立つ。気持ちがこもる「ぺし」と言う。力が入っていく感じ、みんなの力がね。それでああいう言葉使ってると思うんです。私はそう感じてます。やっぱり、力が入った感じありますよね。

【男性A】 「頑張ろう」と「やっぺすよ」とかね。

【女性A】 「やっぺし」、うん。

【男性A】 「やっぺし」、「やっぺし」って、頑張っていれば、行動を移すことね。

【女性A】 物を片付けたりだりなんかするときも、「片付けましょう」でなく、「片付けっぺし」。

【女性B】 「ぺし」がな。

【女性A】 「ぺし」って言うのが。

【男性A】 (笑)

【女性B】 うんうんうん。

【女性A】 いがったのがす。それがこう、力が入る言葉だどもね。物片付けたりするのも、「さあ早く片付けっぺし」って言うんですよ、この辺では。

【司会】 若い世代の人も使いますか。

【女性A】 ううん。でも、そういう言葉、使わないですね。

【男性A】 使うでねえか。

【女性A】 でも、その家庭だよ。その家庭の子どもたちによって違う。母ちゃんたちと一緒になってやってる家の子どもたちは、そういう言葉を使う。

【男性A】 んだがらこう、感情が入ったりね、そういうごと違ってくるんですよ。普通「頑張りましょう」と、「がんばっぺ」とするんではね。

【司会】 若い人たちにも、ここ地域の言葉を使ってもらいたいですか。

【女性A】 はい。

【女性B】 出てけば使わんな。

【男性A】 使わないね。

【女性A】 使ってほしいとは思うけど……。私らちっちゃいころはもう、田舎の子どもって感じがあったけど、今はここの子どもたちも、東京の子どもたちも、みんな同じですね。うん。要するにやっぱり、家では言ってるけど、公の場では言わない。今どきの子どもは。(方言が) 嫌なわけではないと思うけど。

#### 4. 大槌町 言語意識の聴き取り 2

【司会】 以前と比べて、ご家族の方と方言を使ってお話される機会っていうのは、去年の地震から比べて増えましたか、減りましたか。

【男性A】 若い人たちは別として、おらの年代なれば、昔そのままを使ってますもね。

【男性B】 その、そのまま。地震があったから、こうなったとか、ああなったってのはないけども。

【男性A】 いづらはニュアンスは違ってるけれども、それでもね、昔の言葉の方言をね、できるだけ使わないで、今の言葉にやろうなんて意識はないですね。そのまま言ってます。だから、孫たちに変に言われてね。なんだって言われて、こういうわけだよっていう説明はしませけれども、特別に、ね。

【男性B】 変わらないと思うけども、たぶんにすれば増えてるやもしれないよ。

【男性A】 うん。

【男性B】 なぜかという、被災にね、遭ってない方々はそれほど変わんないけども、遭った人たちは部落ごとに移ったわけじゃないから。

【男性A】 うんうんうんうんうん。

【男性B】 だから、最初はね、顔見合わせてなんにも言わなかったのが、このごろ言うようになってきた。そうすると、方言、それぞれの部落の言葉が、ニュアンスが少しずつ違うんだ。すつともう、ひとこと、ふたこと言っただけで、あつ、この人は。あつ、もしかすると。

【男性A】 だごの人だつて。

【男性B】 （笑）もしかすると、浜のほうの赤浜だとか、安渡だとか、吉里吉里だとかじゃないかなと。で、反対側のほうの人も、ああ、この人は町方なのか、ね、農家のほうなのか、それが、それで分かるんですよ。

【司会】 はあ。

【男性B】 ちょっとの、そのさっきのニュアンスの違いで。

【男性A】 うん。今でもそうですね。

【男性B】 それ、今、ちょっと言ったので、山田のほうの言葉の中には、必ずそこ言葉の流れがあって、で、「そうだすけに」って言う。

【司会】 それどういう意味ですか。

【男性B】 そうですから。

【男性B】 「すけに」って言う方言の、出てくる。それから、吉里吉里は「ばあらあ」って言う、そのね、文、言葉の最後に「ばあらあ」って言う言葉が方言で使わさるんですけどね。

【司会】 「ばあらあ」って言うと、どういう。

【男性B】 うん。それはね、本当はね、「あら」とか、「わ」とか、まあ標準語ですね。それが今度は、その安渡ってね、この大槌に近づくにしたがって、それが安渡のほうで「ばー」、「だー」。

【男性A】 感嘆語っていうのがね、今でいう言葉で言えばね。

【男性B】 うん。というふうに同じ意味合いをなす言葉が、ちょこっとの入り江をね、変えただけで、そうなってくる。

【男性A】 こっちのこれからの上のほう行けば、なんていうかな「えじょう」って言う言葉使うか分かんないですよ。

【男性B】 「えじょう」ってね。

【男性A】 「えじょう」ってね。

【男性B】 うん。

【司会】 どんなふうにするんでしょう。

【男性A】 そうだね、何がを否定するこれだよって言えば、まさかって言う意味合いよね。「えじょう」って、こうね。うん。そういう言葉を使ったりしてるよね。

【男性B】 うん。ね、小鎚のほうから「えじょう」、それから鶴住居、橋野で「えぞ」って言うふうになる。

【男性A】 うんうん。そういうふうな言葉使うね。

【司会】 そういう、地域の言葉をよく使うようになりましたか。

【男性A】 あまり使わないね、それはね。

【男性B】 うん。たまにその、小鎚そのものはそんなにね、変わらないと思うけども。

【司会】 仮設の中に。

【男性B】 中では、たぶん、逆に多くなったと。

【男性A】 ああ。

【男性B】 というのが、たまたまね、いろんなところからこう入ってきたんだけども、その中

で自分のとこの部落から来てる人もいると。そうすると、それを確かめ合うっていうことになっちゃう。その方言の、そのちょこっとした言葉じりに。

【司会】 じゃあ、自分と同じ。

【男性B】 同じだということを確認合うっていう。

【司会】 ああ、なるほどそうですか。

【男性A】 あと、昔の年寄りだづがね、普通だったらわれわれであれば「おはよう」どが、「おはようございます」って言いますけれどもね、「おはようござんす」と。

【男性B】 「そうでござんす」「ああでござんす」。

【男性A】 「そうでござんす」と。

【司会】 最上敬語ですね。

【男性B】 「おひなり」（お目覚めになる）って言う言葉と同じです。

【男性A】 うんうん。

【司会】 若い人に対してはどうでしょうか。方言を使って子ども、あるいは、お孫さんたちに話す機会っていうのは。

【男性A】 今はやっぱり、気をつけてやってる方もいますよ。昔はね、その地域だら地域の結婚がね、町方から来るとかってことはなかったんですよ。それ今、東京から来たり、青森がら来たり、北海道から来たりね。みんな入れ替わって、どこの嫁さんがね、どこだかわがらなんですよ。

【司会】 ああ、なるほど。

【男性B】 東京からも来てるんですよ。だから、それぞれの言葉が入り混ざってね、昔の言葉は使っていない部分はあると思います。

【司会】 気をつけるっていうのは、方言を使わないように気をつけてるってことなんですか。

【男性A】 いや、気をつけなくても、ごく自然に、なんていうがな、出てるのかな。そこら辺はね。

【男性B】 やっぱり、相当今言うね、東京がら嫁さん来たとなれば、やっぱり分かんない。

【男性A】 ううん。

【男性B】 普通言ってる会話が、何を言ってるのかしらと。確かに。ただ、それが慣れてくると、ああ、そうなんだというふうになるけども、やっぱりね、そのあちらから来た人は、最



後まで変わらないっけ。埼玉だとかね、千葉なら千葉の言葉が、やっぱりこっち来て、こっちの言葉になるかといってもならない。

【男性A】 うん。こっちの言葉はね、使うけど。

【男性B】 んだけども。

【男性A】 孫たちは使いますね。

【男性B】 やっぱり暮らしてれば、分かるらしくて。

【男性A】 だから、うちの孫、今、二十八になって、小さいころ、娘と来てお風呂さ入れて、うちのばあちゃんが風呂で頭洗ってけだわけだ。こう「しゃがめ」って言うやつをね、頭を下げるって、ほら、「こんまれ」って言うの。「こまれ」「こんまれ」とね。頭下げて、「こんまれ、こんまれ」って言ったらね、「お母さん、どうやって困ればいいのか」とね。

【男性B】 全然「こまっ」てないっちな。

【男性A】 困ってないんだもの。どうやって困ればいいのかという、そういうごとありますね。それで笑ってる。うん。

また、うちのばあちゃんがね、やっぱり娘のどこ行ってね、大失敗したつうのはね、娘の友だちが来たんだって、それで親だから、娘がお世話になってると思って、「うちの娘が、は」、何それで「は」という間言葉、使ったんだって。「うちの何それが、は」「お世話になって、は」ってね。そうしたらね、相手の人が、「お母さん、その言葉の間に言う「は」というのはどういう意味ですか」と聞かれたってね、笑ってらったけどもね。よく言うんですね、ここら辺の人は。「何々、はー」「世話になってやんす、はー」どがってね。

【男性B】 盛岡のほうでは「なは」と。花巻でも盛岡でも「なは」と言ういうがなんとね。

【男性A】 んだけども、そうだね、新しい言葉つうのは、意識的には使わないけれども、ごくね、気持ちの中で使わさってる部分があんですよ。

【司会】 「ほにほに」なんていうのも、お孫さんたち分かりますか。

【男性B】 ああ。「ほにほに、そうだ」ってね。

【男性A】 「ほにほに」ね。うん。

【男性B】 ううん。まあ。

【男性A】 よく「ほにほに」、やるんですね。

【司会】 お孫さんたち分かりますか。

【男性B】 分かんないと思う。

【男性A】 おら家、うちではね、「ほにほに」は使わないようだな。

【司会】 じゃあ、お孫さんたちと話すときは、あんまり方言は使わないようにしてらっしゃるんですか。

【男性B】 どうだい。(笑)

【男性A】 ううん。だね。そうだね、おらだは例えばご飯だったら、朝飯でも昼飯でもなんでも、「ままだ」ってとか言ったんだけどね。朝も「まんま」、お昼も「まんま」、ご飯食べる「ままだ」ったんだけど、朝ご飯だよとがね、お昼だよとが、夕飯だよとがって言うようになってるがね。うん。昔は「まんま」だけで通ったんですよ。

【司会】 震災があってから、ボランティアの方、外からいらっしゃること多いですよ。共通語をしゃべるようになる機会は増えましたか。

【男性A】 まあ、よくボランティアで各家庭を回って来ますけれどもね、やっぱりその対応はね、相手と分かる会話をしますわ。

【司会】 その共通語を使う機会って増えましたか。

【男性A】 まあ、災害によらず、近代になってから、増えてきてるべね。昔と違ってね。

【男性B】 んだ。昔とは違う。

【男性A】 災害があつたがら特につてなく。徐々にそういうその表現がね、今、はやりになってきてるっていうのがね。

【司会】 方言、お好きでいらっしゃいますか。それとも、方言はもうなくなっても構わないとお感じになりますか。

【男性B】 俺とすれば、自慢なるなど。その方言がね、俺は、ここの者だというのがこの証明書なるなど。私も都会に7年ほどいたことあるから、確かにね、言えなかった。でも、考えてみりゃあ共通語って言うけども、でも、東京に行ったがらって、みんながみんな同じ言葉じゃないもん。

【男性A】 ううん。

【男性B】 ちょこっと外れると、東京都内でもほんとの中心部はそうかもしれないけども、郡部に入っちゃうと、やっぱりその土地の言葉が出てきていますもの。だから、私にすれ

ば、その若いときはなんだがね、こっちの言葉で言えば「おしょうし」って言うんだけどね、恥ずかしいと思ったけども、今だと、ざまみやがれと。お前、東京弁使ってるけども、お前の親父、お袋はどこかの田舎から来たんだろうとね。それ恥ずかしがって共通語使うより、黙ってその国の言葉を使ってみろという気持ちになるんだな、今は。若い時はそうじゃなかった。やっぱり田舎から来たっていうのが分かるべ。

【男性A】 標準語っていうか、どうだけれども、言葉っていうのは荒れてっからね、今はね。標準語さえも。

【司会】 荒れてますね。

【男性A】 ええ。んだがら、昔こちら辺の方言ってやつが、その一つの言葉があらゆる要素が含まって、その一つで相当表現が広がってんですよね。今の言葉つつうのは単身（たんみ）で言ってるから。よその何もなくて一つ言葉でね。われわれのその表現はね、幅広い要素が含まった言葉で言うてるわけなんですよ。そこら辺の違いで、方言も捨てたもんじゃないと思うんですよね。

【司会】 自分たちのお子さん、お孫さんにも、大槌、小槌の言葉をずっと受け継いでほしいとお考えなりますか。

【男性A】 ああ俺、それまでは考えてないね。ただ、捨てではもったいないと思ってますね。私の場合は、こういうふうに、ここの言葉でね、こうやって取ってんですよ。この辺でのやつ（方言）をね。この地元としての言葉。

例えばこういえば、窮屈だとか、しっくりいかなってやつをね、「えんず」って言うんですよ、この辺では。「えんずなっどが」。それから、おりますかってことを「いでえすか」とかね。あどは、糞尿を歳をとってから漏らすことをね、「えびたれ」って言うんです。行儀が悪いってことは「えざまい悪い」。そうでなくてもいいんだよ、というのを「えとど」って言うんですよ。あどは今言う、まさかっていうごど「えじょう」とかね。一生懸命って言うごどをね、「えずりむずり」どがね。あどは、ときなすかまわらないごどを「えずだり」。

【男性B】 「えずだりかずだり、そんなごどして」って。

【司会】 そういう方言をお孫さんなどに受け継いでもらいたいと思いますか。

【男性B】 面白いと思いますよ。

【男性A】 うん。

【男性B】 私は。

【司会】 面白い。

【男性B】 面白いと思う。例の若い人たちの、その言葉を縮めてる、その中にも結構いろんなところの方言があるはずなの。それが知らないで、初めて聞いた相手の若い人が、おっ、これは面白いと思って、結構やってるはずなのよ。で、自分が言ったのそうじゃないと思ってんだけど、それをずっとたどって行くとね、埼玉だったり、へたすれば鹿児島だったり、いろんな方言が縮んで、いろんなね、今の若い人たちの言葉になってるはずなんだよ。

【司会】 「がんばっぺし」って言う言い方が、去年あたりからあって、あの言い方はどういうふうに皆さん感じますか。

【男性A】 「がんばっぺや」どがね。うん。あれは使いますよ。何かあれば「がんばっぺしよ」と。はいはい。今でも使いますよ。

【男性B】 「ぺし」のどごでしょう。

【男性A】 「がんばっぺし」つうのもね、これ相手に言う言葉ね。

【男性B】 標準語に頑張ろうってのが、こうなるわけだね。

【男性A】 うん。

【男性B】 それに「がんばっぺしなお互いに」って、こう言う意味合いがある。

【男性A】 そうそうそう。

【男性B】 それが方言の、今言う幅が広いっていうのは、単なる言葉そのものじゃないと。生活に結びついていることなんだと思います。

【男性A】 何があってもね、例えば不幸があっても、その家でそれ、じいちゃんでもおばあちゃんでも亡くなってから、落ち込んでるすけ、「まずまず、がんばっぺし」と。

【男性B】 「がんばっぺね」と。「がんばっぺしよ」と。力づける言葉もあるわけだね。

【司会】 被災されたころ、言葉のことでいろいろ困ったこととかありませんでしたか。ボランティアの方がたくさん入って来て、それで言葉がなかなかうまく通じないとか。

【男性A】 おらはあまりながったがね。

【男性B】 でも、というよりその、ボランティアの方々がのほうが困った。言ってる事がわからない。けども、それをね、聞き返すのが失礼なんじゃないかと思っているのが分かって

すよ。分かんなくていだなとね。だけどそれをまた聞き返すと失礼じゃないかと思ってもぞもぞしてるのが、逆に分かったです。

【男性A】　ここら辺の地元の人たちだったらね、関係ないけど、よそがら来たときはね、相手も困るだろうし、こっちは構えて言うから、聞こえっか分かんないけども、標準語に変えてね。

【司会】　あ、皆さんのほうがね。

【男性B】　それでもね、やっぱり変えだといっても、うまくないんですよね。

【男性A】　かえって分かんないような気がする。

## 5. 山田町・言語意識の聴き取り

【司会】 以前と比べて、ご家族と方言を使ってお話される機会は、減りましたか、変わりませんか。

【女性A】 減ったと思いますよ。ええ。みんなが、私も含めてですけども、今の人たちってというのは、山田弁ってというのは知っているんだけども、あんまり出さなくなりましたね。

【司会】 それは震災とは関係なく、今そうになってしまってるってことですね。

【女性A】 そういうことです。いろんな方が、いろんなところから、いっぱいいろんなふうに入って来てますので。それで、（山田の人同士が）お互いが言うときには、「ちょっとしばらくだったかな、げんきだあ」ってこういうふうに聞くんです。みんなが。そうすると、相手も「うん。おら、元気でだが、今、どこにいだあや」みたいな感じなんですよね。そうすると自然に山田弁に戻るんです、みんなが。だから、山田人对山田人だったらば、まだ弁ってというのは生きてると思いますよ。

【司会】 なるほど。で、外からたくさん入ってくると、やっぱり。

【女性A】 ころっと変われるんですよ、人ってというのは。変われない人もあるんですけど、たいていの人が変わると思いますよ。して、変わらなければならないと努力したが故のかたちになったんだと思います。

【司会】 山田弁と共通語と比べると、どっちを使うことが多いですか、毎日の生活の中で。

【女性A】 やっぱり半分以上は、山田弁じゃなくなってますね。

【司会】 そういう状況をどうお感じになりますか。

【女性A】 ううん。さみしいなあとは思いますが。でも、これが現実なんだと思ってます。

【司会】 震災後に言葉のことで困ったこととかありましたか。例えば外から来たよその方とお話しされる時、言葉が通じなかったとか。

【女性A】 まあ、私は、このとおり家の中でばかり仕事をしているから、そういう体験はなかったですね。

【司会】 お知り合いではどうでしたか。

【女性A】 みんな適当に。適当ってというのはなんかおかしいけれども、スイッチを変え

て、山田人对山田人だとさっき言った具合になるんだけど、例えばですね、よそから来た方に、「あら、そちら、今日のご苦労さんでござんしたった。どごからおでんしたのい」って聞いた人は、そんなにいないんじゃないでしょうかね。

山田弁でそれをずっと通していても分かるんですよ、きっと。よそから来た方も分かるんですよ、きっと。だけど、分かるとは思いつつ、なんかついつい今はそうしなきゃないような気持ちになって、まがりなりにも下手は下手なりに、なんか、みんなが分かるような話をしなくっちゃない、言葉を使わなくっちゃないと思うから、七十のおばあさんも、八十のおばあさんも、「いやあ、今日はここでこんなことしてたでえたもんだから、楽しかったがんです」とか、そういうふうな言い方をしながら、「まだおいでてくださいね」って、こういうふうに行く人と、「また来てくださいね」って言う人とどっちが多いんだろうなと思うと、「また来てくださいね」の人が多いいんじゃないかなと思うなあ。

【司会】 「がんばっぺす山田」とか、そんなステッカーみたいなのがいろんな所に貼ってあることがありますよね。ああいうのを見て、どう思いますか。

【女性A】 私ってはっきり言いますとね、私ってあれはね、正直に言いますけどね、言っているのかな。

【司会】 どうぞ。

【女性A】 なんかね、取って付けたように、ほんとはそうでもないのに、そういうところだけ強調すんなよと、こう思うような時はありますね。うん。そして、ニュアンスっていういろいろあるんですよ。「がんばっぺす」というとこど、「がんばっぴす」というどこと。

【司会】 「がんばっぴす」は、ここ（山田）がそうですね。

【女性A】 はい。ここは、「ぴ」なんですよ。「ぺ」は、どっかなんですよ。それから、もっと南に下がっていくと、「がんばらい」なんですよ。気仙から大船渡あたりまで、「がんばらいよ、ともちゃん」みたいな感じで（笑）。そんな感じなんですよ。

【司会】 じゃあ、「がんばっぴし」と言ってほしいところですね。

【女性A】 うん。そうするとね、例えば私は生まれながらに「がんばれよお」とか、「ここでがんばねば駄目なんだがよ」とか、「がんばっぴしやな」とか、こういうふうに出てきたのに、何、そんなの、田舎の言葉だけでなんだりかんだり使うなみたいな感じでね、ここはそうでねえがみたいな感じなところもあるんですよ。うん。

【司会】 山田でも昔の文化とか、お祭りとか、そういうのを復興させるという動きはあるでしょうか。

【女性A】 もうあります、あります。お祭りも去年も形だけでもお祭りというものをやりたいっていう気持ちで、実はずちの娘も一枚かんでるんです。ええ。それで、なんとか頑張りたい。みんながもうやりたいことは、百分の一できたか、できないか分かんないけど、とにかくお祭りとして、形としてやった。大杉神社は壊れてしまって、神輿もこんなだったけれども、それでもお祭りはしたんだっていう、なんかここにはつかえてはいるけれども、まあ、今はこれで我慢しなくちゃないっていうところまで漕ぎ着けたと思いますよ、皆さんが。だから、ここから先は、もっともっと頑張るんじゃないでしょうか。

【司会】 ふるさととのつながりを考えるうえでお祭りも大事ですが、地域の言葉、方言というのは大事なものでしょうか。

【女性A】 もう大事だと思います。私、こんな言葉で言ってるけれども、出るところに出て、そののどこへ行ったら、「皆さん、今日のご苦労さまでござんした。ぼおのさのかまど（坊の沢の分家）のとも(人名)でござんす」ってこういうふうに言いますもの。努めてそういうふうに言うと、みんな、あれ、ともちゃんがいつもはあんなんでもねえくせに、あんな言葉で今日はしゃべってたがやったがなあみたいな顔をする人もあつけど、でも、私ね、そういうふうに使分けるときもあるんです。(笑)

【司会】 地域の方言を次の世代に継承することについては、どうお考えになりますか。

【女性A】 私は、全く無理だと思いますね。厳しいと思います。例えば私は、ある私的な通信物で山田弁特集をやったんです。今、高校を卒業して、2、3年たつのが私のめいっ子にいますが、読ませたって、「おばちゃん、これ何。分かんない」って言う。それが現実です。

年寄りが一緒に暮らした家の子は、まだいいんです。ところが、分家したとか、本当は長男なんだけれども、そっから出た若い夫婦は若い夫婦で子どもを育てて、年寄りたちは年寄りたちで家にいるみたいな暮らしをした人たちの場合は、言葉というのは、もう半分以上消えてんじゃないかなあ。半分なんてないと思いますよ。

【司会】 子どもとか、お孫さんたちにその山田弁を受け継いでいてもらいたいと思



ますか。

【女性A】 思う。思うけれども無理です。実はずちの娘が、山田の町の中で仕事してるんですが、仕事場にはいろんな人が、もう定年間近の人から、二十歳ぐらいの若者までいろんな人たちがいて、仕事してるんですけども、職場でも年寄りっていうか六十ぐらいの人たちが、二十歳から三十前ぐらいの青年たちがどのぐらい山田弁っていうのを知ってるのかなって、こう試す時があるみたいなんです。「おめえ、これでわがつか」って聞かれた。「それって、こういうことですよ」って。そうすると、「うん。よく分かったなあ」って言われた。そうしてるうちに、それに乗じて得意になって、いろんな話を聞いたり、ここで聞いてたり、(方言を)知ってますから、それで使ってみた。そしたら、分かる人はなかったみたいに言うんですよ。

いくら方言でも、山田弁でもね、みっともない山田弁っていう、そういうとこで使う山田弁と、それから内々で使うのと、おじいさんだの、おばあさんだから使える山田弁っていうのと、ほんとに全く赤の他人の目上の人がいるとこで使う山田弁っていうのとある。そこを知らないで、山田弁だからって何でもかんでも一緒くたにしたら、笑われんだからね。そこんどこ気を付けて使わないと。山田弁だからって、何でも山田弁でいいものではないんですよ、私、このごろ言うんです。

そんなふうね、使って得意になって言ってる子どもたちも、全く、ばか、そんな人たちにそんな言い方すっかって思うようなことを言ったりしてるみたいなんです。だから、それって山田弁は知っているけれども、使い方を知らないということなんです。

【司会】 敬語がやっぱり難しいんですね、山田弁の中でもね。

【女性A】 はい。例えば、客が玄関先にみえました。「まあまあ、遠々(とおどお)からよくおでてください。ご苦労さまでござんす」って。こういうふうに言ったとしますよね。これっていうのは、ほんとに敬って言った言葉なんです。「ほんとにほんとにご苦労さまでござんしたった。遠いところを」って、こういうふうに言ったり、「遠々からおいでくださいふうだが、なんたらなんたら長(なが) ござんしたったべ」っていうふうに言うわけです、労をねぎらいながら。「どうぞ、どうぞ、もう上がってください。お上がりあってください。何もねえども、ほんとにほんとにおしよすような家でござんすがい」ってこういうふうにするわけですね。

ところが、それがしばらくぶりで来た人とか、顔見知りとかが来たとします。「よぐ来た

がなあ。おめえもしばらぐだったが」って、こういうふうから始まるわけです。ずっとずっと明治に生まれた人だったら、「まあ、あがってごぜえ、まあ。遠くから来てご苦労だったが。きゃあ、めいね島が見えていい日だが」ってこういうふうに言うんです。今日は天気がよくて、珍しい人がみえたという意味なんです。今日は見えない島が見えた。見えない島が見えたっていうのは、今ここに立ってる自分が、親しい、来てくれてありがたい、うれしい、自分の身近な、遠くに住んでいる身内。そんな人が来た時、年寄りたちはそう言ったんです。「きゃあ、いい日だ、いい日だ。見えねえ島も見えたが、上がってごぜえ、早く」って、こういうふうに言うんです。ええ。明治から大正ぐらいの年寄りたちは、そういうふうな言い方をします。この違い。こういう話のね、ニュアンスとか、違っているのは、ほんとに聞いて育った人でなければ分からないんです。

【司会】 娘さんの世代は、そこら辺はちょっと難しいわけですね。

【女性A】 もう難しい。難しいっていうよりも、もう死語でしょうね。見えない島が見えたとか、そういうふうな言い方をしたって、「え、何。お母さん、今のは。やめてよね」みたいな感じだと思いますよ。



# 被災地の行政職員の方言意識

## —岩手県職員，宮古市職員—

田中 宣廣

### 1 方法

#### 1. 1 調査の概要

この調査は，東日本大震災の津波被災地の自治体の行政職員の方言に対する意識を尋ねたものである。

#### 1. 2 回答の方式

調査票は，当研究の福島県担当 半沢康教授の作成した自治体職員用方言意識調査票をもとに，この調査に合わせて筆者が調整したものである。

全質問とも，参考のための選択肢は用意してあるが，すべて筆者が調査員となり，聴き取った回答である。

質問は，事前に知らせておき，調査員（筆者）の聴き取りのとき，回答は，おおむね用意されていたので，質問に対してそれを教えていただきつつ，調査を進めた。もちろん，回答に関する疑問点などは，その場で解決することができた。

#### 1. 3 回答者

ご協力いただいた回答者は、岩手県庁の職員、および、同県の宮古市役所の職員、各々1名計2名である。お二方の言語歴は、以下のとおりである。

岩手県職員：田老町（現 宮古市田老地区）出身。平成24年で42歳。高校まで田老地区に居住。岩手県職員任用後は盛岡市他の岩手県内各地にも勤務。ここ数年は宮古市内の県機関に勤務。

宮古市職員：宮古市（旧宮古市域：田老町，新里村，川井村との合併前の区域）出身。平成24年で40歳。大学4年間のみ関西に居住。それ以外は、宮古市内に居住，勤務。

なお、震災後は、岩手県庁の宮古市内の機関でも、宮古市役所でも危機管理の部局が災者支援の中心ではあったが、現実には全部局が被災者の支援活動に当たった、という事実を正しく理解すべきである。つまり、今回の回答者お二方とも、被災地において救援活動に深く関わっていらしてわけである。

また、お二方とも、ご自身が被災者である。県庁職員の方は、上記のとおり宮古市田老地区出身で、同地区にあった実家を津波により失った（震災時の私宅は宮古市の津波先端からわずか先で被害を免れた）。田老の漁協ビルから撮影された、堤防を越えて津波が襲いかかる写真が多く新聞に掲載されたが、そのなかに写っている家屋である。宮古市役所職員の方は、宮古市役所本庁舎が津波の直撃を受け、中破して2階まで水没したため、翌日まで上階で救助を待っていた。（下の写真：宮古市役所本庁舎被害の様子：筆者撮影）



## 1. 4 回答の内容

回答は、質問ごとに、次節より、回答者の回答を、岩手県職員の方（岩手県）と宮古市職員の方（宮古市）とに分けてそのまま記載することにより示す。

## 2 方言・地域文化復興への取組みについて

（自治体の方言復興等への取組み状況，計画等）

### 2. 1 被災・避難地域の地域文化やお祭りを復興させたり，文化財を保護したりという 取組みの計画等について

※以下に示す，新聞報道例（元はカラー）を提示して尋ねた



### 2. 1. 1 岩手県

ある。宮古秋祭り，鯉祭り，カニ祭り，田老大漁祭，その他，復興に関するイベントなどである。

### 2. 1. 2 宮古市

宮古市の祭に，伝統的なものはない。夏祭りも秋祭りも，第二次大戦後に始まったもの



【提示資料 県外避難者の様子を紹介した新聞記事 2】

ニュース 一覧

### 避難者の悩み、孤独・土地勘なし…それに

ツイート 0 | おすすめ 1 | チェック 2

東日本大震災のため東三河地域へ避難してきた世帯を対象に、愛知大学地域政策学部(愛知県豊橋市)の学生たちがアンケートを行い、回答を集計した。

孤独や言葉の壁といった悩みを抱えている人もいて、被災から1年が過ぎても避難生活になじめない心の内がうかがえる結果となった。

アンケートは、同学部の学生16人でつくる「たすけあい隊」が、避難者の現状を明らかにして支援の方向を探ろうと、豊橋市など東三河5市に避難している60世帯を対象に、今年1月から2月にかけて実施。31世帯から回答があり、内訳は福島県からの避難者22世帯、宮城県6世帯、岩手県3世帯だった。

避難先を選んだ理由(複数回答)は、「家族や親族がいるから」との答えが最も多く、次いで「放射能の心配がないから」だった。

困っていることについては、「友人がいないのがさびしい」「土地勘がなくて四苦八苦」といった悩みのほか、「言葉の壁、方言」との声も。自由に書いてもらった答えでは、「原発で同じ思いをしたくない。浜岡原発が近いので永住するかどうか迷っている」とする回答もあった。

(2012年9月20日 読売新聞)

【提示資料 県外避難者の様子を紹介した新聞記事 3】

毎日jp 天

ホーム ニュース オピニオン スポーツ エンタメ 地域 特集・連載 ENGLISH

地域 大盛り北海道 いりやあせ名曲屋 めっちゃ関西 オッショイ!九州 検索 記事 毎日配信

トップ > 地域 > 記事

[PR] 被ばく女なし…。婚活で独り身放出！今すぐ結婚刀診断⇒

記事を印刷 | 文字サイズ 小 中 大

### 東日本大震災:被災3県避難者、「移住を検討」7割 被ばく不安強く--毎日新聞アンケート

毎日新聞 2012年09月08日 西部略刊

生活費金の窮乏も深刻で、4割弱の14人が「苦しい」「どちらかと言えば苦しい」。ストレスについては、福島県楡葉町から北九州市に避難している男性(55)が「戻る見通しが立たない」とし、同県南相馬市から福岡市にきた女性(35)は「放射能をどっぶり浴びたのではと不安」と漏らした。

宮城県東松島市から大分県宇佐市に逃れた女性(33)は「方言が違って近所の人と話せず、気持ちが沈む」と訴えた。体調の異変は「胃腸の痛み」「不眠」が目立った。

一方、8割弱の27人が、被災地以外への移住を考えており「被ばくへの不安」「避難先で仕事が見つかった」などを理由に挙げた。

## 2. 3. 1 岩手県

外部団体に補助金 仮設住宅に、月刊のフリーペーパー『こころ通信』を配付している。

## 2. 3. 2 宮古市

宮古市の被災者の場合、県外への避難者はほとんどいず、宮古市を離れての避難となる



と、岩手県内の内陸部への避難者である。

多くが縁故者，たとえば，盛岡に就職している子女や，内陸部に居住している親戚などを頼るので，ストレスが多くなるというのは，あまり聞かない。

## 2. 4 「方言による被災者の心的な支援」の計画について ～方言研究者が協力する余地があるか～

### 2. 4. 1 岩手県

計画は特にない。

### 2. 4. 2 宮古市

心的支援が必要な避難者は，（「2. 3. 2」のとおり）認められないが，避難者に宮古の状況を伝える取り組みについては，計画ではなく，実行段階にある。避難（転居）先の判明している避難（転居）者に対しては，「広報みやこ」（宮古市役所による月2回発行の広報誌）は，送っている。

## 2. 5 ふるさととのつながりを考えるうえで「方言」は大変重要なものだという，方言研究者の考えについて

### 2. 5. 1 岩手県

そのとおり，重要だと思う

### 2. 5. 2 宮古市

直感的に，必要だと思う。年配者にとっては，特に重要である。

行政職員としては，応対相手の発言の理解という実用面で必要である。

個人的な体験として，遠方の土地で，自身と同じ方言を聞くと，同郷の人だとすぐ分かり，話しやすくなる。つまり，方言が，コミュニケーションの壁を取り払ってくれるわけである。

## 2. 6 今回の災害で地域の方言が失われることのないよう、文化庁による保存、継承への取組みを支援する取組みの必要性や重要性について

### 2. 6. 1 岩手県

特に必要ない。文化庁がしなくても、方言は地元で継承されていく。

自分の郷里の田老では、昔から数十年おきに大津波に襲われているが、田老の方言は残ってきている。残るべきものは残ることを実証している。

たとえなくなってしまうても、それは自然の成り行きなので、仕方がない部分もある。

作為的に残そうとしても、残る残らないは宿命である。

自然淘汰に任せるのが良い。

「ことば=道具」なので、記録よりも使われなければ意味がない。

### 2. 6. 2 宮古市

宮古市の方言がなくなることは、昔からのコミュニティーが崩壊してしまうことにつながるので、文化庁の今回の方言の保存および継承の取組みは、コミュニティー維持のため必要なもので重要である。

宮古市では、東日本大震災の被災地の中で唯一、特に、仮設住宅への入居は、元のコミュニティーごとに入居させた。このコミュニティーを維持しつつ、今後の災害公営住宅への入居や地区ごとの高台移転を進めることができる。

ただし、方言とは、世代間で失われていくものであるから、方言の（「2. 5. 2」で述べた）重要性を、若い世代に理解させていく努力をすべきである。

## 2. 7 宮古市の方言に対する好悪や愛着について

### 2. 7. 1 岩手県

愛着を感じる。その世代のアイデンティティーである。

録音などの記録資料より、実際に使われることが大切である。

被災者や年配者に語りかけることは大切である。

## 2. 7. 2 宮古市

好き。愛着がある。

特に関西の大学に通って4年間郷里を離れた経験により、宮古の方言に対する愛着はよりいっそう強くなった。

具体的には、イントネーション的にやさしい感じがする。

## 3 方言の問題・効用について

(支援者等との間の方言摩擦、方言使用の効用)

### 3. 1 震災後の、支援者と被災者との間での、方言が通じなくて困った事例について

#### 3. 1. 1 岩手県

事例に接したことがない。そういう事例のあることは想像できる。

#### 3. 1. 2 宮古市

テレビで、県外から救援に訪れた医師の困った様子を見て聞いた。

遠方からの支援者と、被災地の自治体職員との対応は、もし、言語での伝達が不完全のことがあった場合、言語外伝達で補完している。言語外伝達も十分コミュニケーションの助けになっている。

### 3. 2 支援者向けに地域の方言を解説したパンフレット作製の取り組みの必要性について

※方言パンフレットの実例として、次ページに示す、東北大学方言研究センター『支援者のための気仙沼方言入門』、および、竹田晃子氏作成『東北方言オノマトペ用例集』の「表紙」を提示して尋ねた。(気仙沼のほうは、現物はカラー印刷)



### 3. 2. 1 岩手県

必要か不要かについて、どちらとも言えない。

### 3. 2. 2 宮古市

パンフレットで予習しておくことは、現地の人と接するとき、“話のネタ”にはなる。ただし、パンフレットでは、満足な意思疎通には不完全である。

もし、会話の中で不明のことがあれば、話の相手に直接尋ねればよい。相手とその方言に関する話をしながら、さらに人間関係を深めてゆくこともできる。

パンフレットは観光用には有用である。

### 3. 3 震災後の方言エールが地域の方々の力になったか、について

※次ページに示す画像例（元はカラー）を提示して尋ねた



### 3. 3. 1 岩手県

親しみが持てる。励まされた。

方言による、というのは、地元のことばによる、ということ。

方言が「文字」になっていると、「やらなければ」という気持ちになった。

「ステッカー」になっていたのは感動した。

特に、震災直後の早い段階でこの気持ちは出てきた。

### 3. 3. 2 宮古市

親しみが持てる。良いと思う。

それぞれの地域の人が、それぞれの思いを持って、自分たちのことばにより自らを奮い立たせるのは素晴らしい。

外部からの救援者たちが、被災地の方言による方言エールを示してくださると、親しみを持てる。

### 3. 4 「がんばろう東北」のように共通語によるエールからみた方言エールについて

#### 3. 4. 1 岩手県

方言によるエールのほうが、より励まされる。

共通語だと他人事のように感じる。

#### 3. 4. 2 宮古市

エールであれば、共通語と方言と、どちらもある。

共通語によるエールは、全国の人々が応援して下さる感じを受ける。

地元の人が地元の人に対して提示するのなら、方言エールとなるし、方言エールであれば、自分自身を奮い立たせる力もある。

受け手に合わせて、方言でも共通語でも、どちらもあるとおもう。

### 3. 5 「がんばってや東北」とか「ちばりよ一東北」など他地域の方言を使った方言エールについて

#### 3. 5. 1 岩手県

地域が広まるのは良いことだと思うものの、気持ちが薄まるような感じになる。

#### 3. 5. 2 宮古市

励まされる。遠くから来てくれたことは、ありがたいことである。

発信元の地方を明らかにしていただければより良い。

### 4 その他 宮古市の方言に関する取り組み、あるいは、方言にまつわるエピソードなどについて

#### 4. 1 岩手県

①防災には、教育が大切である。

②東日本大震災の前から、田老地区では、毎年3月1日に、小学生対象に体験談を聞か

せ、年少のうちに津波の恐怖や地震の後の避難の重要性について、十分理解させている。これが、小学校の6年続くので、田老地区では、今回の震災の人的被害を比較的少なく抑えることができた。

- ③これからは、津波の体験談を、小学生、中学生、高校生対象に、【方言で】語ることでできる人のリストを作って、この体験談を「より身近なこと」として理解できるように整えておくのが望ましい。
- ④今回の調査は、報告書をまとめて終わりにしないほしい。あとにつながるよう、人々が地域や方言を大切にするよう、啓蒙するために役立てていただきたい。
- ⑤学生ボランティアはえらい。自分自身も被災して、なかなか他人の援助ができなかった。その代わりでもないが、学生赤十字奉仕団が活躍できる道筋をつけていくようにしたい。

#### 4. 2 宮古市

- ①方言は、高校までは苦はなかった。周囲の人間も皆同じ方言だった。
- ②大学で県外（関西）に行き、（宮古の方言から）「ダベ」というあだ名がついた。  
（筆者注：「ダベ」とは、宮古の方言で、確認のときに、直前の会話の内容を受けて用いるひょうげんである。回答者は、これを関西の大学でもよく発していたため、このあだ名がついたということである）
- ③方言は、他人から見た「人格」を形成している。
- ④同郷の人は、方言により親しみを持てる。同様の人格を有していると言ってもよい。
- ⑤宮古市内でも地区により方言が異なる。（方言エールや、方言集により）活字になった宮古の方言は、『宮古標準語』である。

#### 5 まとめ

自治体職員は、このような大震災に遭って、自身が被災し、実家が流され、また、危険な状況に陥り、さらに、周囲に多くの死者が出ていても、職務を優先するとともに、その気持ちを語るのをはばかりられる状況であった。今回の調査では、それらを含めて語っていただくことができたわけだが、分かりやすく伺うことができたのは、約1年半の間、脳裏

にあったことだからであろう。

特に確認しておきたいことが3点ある。

第一は、今回の回答者お二方は、自治体職員でありつつ、出身地の方言をととても大事にしていることがよく分かったことである。お二方とも、言語形成期は、出身地内で生育したが、その後に他地域の方言のなかで生活する外住歴があったので、自身の母語について、深く考えるようになっていく。そういう方々の見解である。

第二は、防災には、語ることの大切さを正しく理解すべきである、ということである。今回の震災で、中心地区が全滅してしまった田老地区の人的被害が、他地区に比して幸いな状況であったのは、津波の恐ろしさを、昭和三陸大津波（1933年）の体験者が語って子どもたちに理解させる防災教育を継続してきたことの成果である。これを学校教育にまで取り入れており、「地震を感じたら、すぐに高台に避難」は、住民の心と体に擦り込まれていた。この教育も、方言を使って行くと、今後の災害対策により効果的であるという見解もあった。

第三は、「2.6.1」にもあるが、方言が残るかどうかは、人為的な努力より、方言自体の持つ底力によるところが大きいということである。今回の震災の被災地では、その方言の底力は、とても大きいと、筆者は考えている。震災後各地で多数出現した「方言エール」はその証左である。それに、田老地区の方言が現在も残っている、という事実が何よりも証明である。明治三陸大津波（1896年）では、生存者わずかに381名（県記録）となり、さらに、昭和三陸大津波でも、甚大な被害を被った同地区であるが、今回の震災前は約4,500名まで人口が増え、そのなかで、方言は確実に継承されてきている。

以上より、私たちは、このような、方言の強い強い力を信じ、今後の言語生活を通して、方言を生きた形で伝えていくことが大切であると、確信したものである。





# 被災地支援者の方言意識

## —岩手県宮古市での例から—

田中 宣廣

### 1 方法

#### 1. 1 調査の概要

この調査は、東日本大震災の津波被災地で、震災後に被災者の支援活動に当たっている（自衛隊や警察、行政の職員でない）一般の人の方言に対する意識を尋ねたものである。

ご協力を戴いた回答者は、岩手県宮古市社会福祉協議会ボランティアセンターのスタッフ、および、岩手県立大学宮古短期大学部学生赤十字奉仕団の会員である。

#### 1. 2 回答の方式

調査票は自記式調査票である。当研究の福島県担当 半沢康教授の作成した支援者用方言意識調査票をもとに、この調査に合わせて筆者が調整したものである。

全質問とも、選択肢から選択するものでなく、実際には「Yes」か「No」で済むものも含めて、自由記述の回答方式とした。

回答は、社会福祉協議会と学生赤十字奉仕団との会議のときに、調査員（筆者）の立ち会いのもと、記入していただいた。調査票を預けての記入～後日回収ではないので、調査の趣旨の説明は直接説明することができ、また、記入に関する疑問点などは、その場で解

決することができた。

口頭による説明のほか、以下に示す、《ご記入の注意点》を、調査票の最初に示し、必要な理解を得たうえで、回答していただいた。

《 ご記入の注意点 》

1. 震災被災地で活動なされている支援者の方の、ことばに対するイメージなどを教えていただきます。
2. この調査は「半構造的アンケート」（統一的な基準で数量集計するものではない）です。ページごとの観点について、質問ごとに、ことばやその他ことに対する意識、意見等を自由にご記入ください。  
  
それを通して、皆さんの方言意識や、方言復興ニーズなどを考えてまいります。
3. 構造的・指示的なインタビューではないので、必ずしも質問の内容すべてにこだわる必要はございません。皆さんの自由な、かつ、率直なお気持ちをお知らせいただきたく存じます。
4. 表紙・末尾のフェイス項目については、可能な範囲でお教えてください。

### 1. 3 回答者

回答者は、以下の17名である。回答者ごとに、回答者符号、出身地、性別、年齢（平成24年11月末時点）、の順で示す。

- A 岩手県金ヶ崎町 女 19歳
- B 岩手県葛巻町 男 19歳
- C 岩手県大船渡市 女 19歳
- D 岩手県滝沢村 女 19歳
- E 岩手県洋野町 女 19歳
- F 青森県弘前市 女 18歳
- G 岩手県紫波町 女 18歳
- H 宮城県気仙沼市 男 18歳
- I 岩手県西和賀町 男 20歳
- J 岩手県西和賀町 女 19歳

- K 秋田県秋田市 男 19歳
- L 福岡県北九州市 男 25歳
- M 岩手県一関市 女 19歳
- N 岩手県奥州市 女 19歳
- O 岩手県大船渡市 女 20歳
- P 岩手県洋野町 女 19歳
- Q 岩手県奥州市 女 19歳

#### 1. 4 回答の内容

回答は、質問ごとに、次節より、回答者の回答をそのまま記載することにより示す。

A～Qは、回答者符号である。

### 2 支援活動の内容とコミュニケーション状況

（方言で話す人と接する機会があるかなどについて）

#### 2. 1 被災地の方と会話する機会はありますか（ありました）か？

- A あります
- B あります
- C あります
- D いいえ
- E いいえ
- F あった
- G ある
- H ありません
- I あります
- J あります
- K あります
- L あります
- M あります

- N あります
- O あります
- P ありました
- Q ありました

2. 2 どちらの方と（どこで）話しましたか？

- A 仮設住宅
- B 宮古市内の仮設住宅（磯鶏，近内，実田，崎山，鍬ヶ崎）など
- C 自分の郷里，および，宮古市内の仮設住宅に住む人たち
- D （回答不要）
- E （回答不要）
- F 宮古の仮設住宅にて
- G 仮設住宅
- H （回答不要）
- I 宮古市内 近内 津軽石
- J 宮古市内（近内 仮設住宅） 山田町（仮設住宅）
- K 仮設住宅地（宮古市内）
- L 被災地域（海岸沿い）に済んでいた方と同地区や仮設住宅で話した
- M アルバイト先のお客様と
- N 宮古市 仮設住宅
- O 岩手県宮古市 仮設住宅
- P 宮古市 実田地区
- Q 宮古市にお住まいの方など

2. 3 相手の方は，方言をどれくらい使用していましたか？

- A まあまあ
- B お年寄りの方が多かったので，いっぱい話していた。
- C 話す言葉ほとんど （ほぼ分かりませんでした）
- D （回答不要）

- E (回答不要)
- F あまり使用していなかった
- G (無回答)
- H (回答不要)
- I 常に使用していた
- J お年寄りの方々だったので、たくさん方言を使用していた
- K 高齢者の方ほど方言を多く使用していました
- L ほとんどすべてが方言でした
- M かなり使用している
- N 分かりません
- O 会話の中で少し出る程度
- P ちゃんとは分かりませんが、全体的に使用していたと思います。
- Q 自分にも理解できる適度な方言でした

2. 4 どのような人でしたか？ (年齢や性別などを教えてください)

- A 女性 80歳
- B おじいさん、おばあさんがメインで、年齢は、60～80歳代
- C 70歳代 女性
- D (回答不要)
- E (回答不要)
- F 60～70歳代の女性
- G 年配者
- H (回答不要)
- I 40～60歳代の男女
- J 60歳代～80歳代の男女
- K 60歳代～80歳代の男性・女性
- L 高齢者が多かった。60歳代～ 男女問わず
- M いろいろな人
- N お年寄

- O ご年配の方
- P 女性のおばあさん
- Q 40歳代～80歳の男性や女性

2. 5 どのような状況で話しましたか？

- A 青空カフェ（筆者注：仮設住宅の中庭のパラソル付き休憩所）での会話
- B サロンボランティアで
- C 傾聴ボランティアでの会話
- D （回答不要）
- E （回答不要）
- F ボランティア活動で仮設住宅に行ったときに話した
- G （無回答）
- H （回答不要）
- I ボランティア活動
- J ボランティアで仮設住宅に行ってお話したとき
- K 仮設住宅でのサロンボランティア
- L 出会い頭のあいさつやボランティア活動の調査のために
- M アルバイト先での接客
- N 世間話のような話
- O 仮設住宅での談話
- P ボランティアで地域の方とあつまって雑談していた
- Q ボランティア中 アルバイト中

2. 6 方言の通訳の人はいましたか？ いませんでしたか？

- A いなかった
- B いませんでした
- C いました 宮古出身の支援員さんに通訳してもらった
- D （回答不要）
- E （回答不要）

- F いなかった。
- G いない
- H （回答不要）
- I いない
- J いない
- K いませんでした
- L いませんでした
- M いません
- N いない
- O いません
- P いません
- Q いませんでした

### 3 方言の問題

（被災者との間の方言摩擦の問題）

- 3. 1 被災地の方言について、困った（わからなかった、戸惑った、驚いた）経験がありましたか？

- 3. 1. 1 被災地の方言について、困った（わからなかった、戸惑った、驚いた）経験の有無

- A 戸惑った
- B なかった
- C あった
- D なかった
- E なかった
- F なかった
- G ない
- H ありません



- I ない
- J なし
- K ほとんどありません。自分の出身地とほとんど同じだったので
- L あります
- M ない
- N ない
- O ほとんどなかった
- P あります
- Q 特にありませんでした

3. 1. 2 「困った」経験のあった人は、  
具体的なことばや、会話の進め方の特徴として、どのようなものであったか、  
わかる範囲で教えてください。

- A しゃべるのが速かった
- B (回答不要)
- C 相手は一方向的に話していた
- D (回答不要)
- E (回答不要)
- F (回答不要)
- G (回答不要)
- H (回答不要)
- I (回答不要)
- J (回答不要)
- K (回答不要)
- L 抑揚がとても特徴的で、単語が聞き取れないことが多かった。
- M (回答不要)
- N (回答不要)
- O (回答不要)
- P 聞き取れなかった

Q （回答不要）

3. 1. 3 困った時どう対応しましたか？

たとえば、聞き返したりしましたか？

それとも、そのまま聞き流しましたか？

あるいは、他の人に通訳を頼んだりしましたか？

または、わからないので、話をやめてしまったことがありましたか？

A 分かっているフリをした

B （回答不要）

C 通訳の方に話してもらったり、聞き流したり。少しでもわかれば、あいづちを打った。

D （回答不要）

E （回答不要）

F （回答不要）

G （回答不要）

H （回答不要）

I （回答不要）

J （回答不要）

K 会話の流れでだいたい分かりました

L 聞き返したり、文脈から判断したり、あとから若い人に教えていただいたりしました。

M （回答不要）

N （回答不要）

O （回答不要）

P 聞き返したりしました

Q （回答不要）

3. 2 方言以外の「話し方」の違いを感じますか？

（たとえば、話の始め方、話の返し方、話の進め方などのことです）

- A イントネーション
- B 私の地元よりもなまりが強い
- C ずっと話している
- D 感じない
- E 感じない
- F イントネーションの違いは感じるが、特に気にならない
- G 感じない
- H 特に感じません
- I イントネーションや語尾の違いがあった
- J 自分の出身地とほとんど変わらなかったが、なまりが強かった
- K 特に感じません
- L (無回答)
- M 少し感じる
- N 感じない
- O とくに感じなかった
- P 感じません
- Q 特にありません

3. 3 宮古やその周辺の方言は難しいでしょうか？

- A そうでもない
- B 難しくない
- C 難しい
- D 難しくない
- E 難しくない
- F あまり聞いたことがないので、わからない。
- G そうでもない
- H 難しくない
- I 難しくない
- J 難しくない

- K 普通です
- L 難しいと思う
- M 難しくない
- N 難しくない
- O 難しくなかった
- P 普通だと思います
- Q 簡単なものしか聞いたことはありません

3. 4 被災地の方に使ってもらいたいことばは何でしょうか？

共通語でしょうか？ それとも方言でしょうか？

- A 共通語
- B 強制することはできない
- C 過度でない方言
- D （無回答）
- E 方言
- F なるべく共通語が良い。
- G 通じれば何でも構わない
- H どちらでも構いません
- I 時と場合による
- J どちらでもいい
- K 本人が好きでなほうで良いと思います
- L 方言です
- M どちらでも良いと思う
- N こだわりはない
- O 方言
- P とくに何も思いません
- Q どちらでもいいと思います

3. 6 支援者として、あなたご自身の方言使用について気を付けましたか？

- A 気を付けていない
- B 共通語で、分かりやすく話すことは、気をつけた。
- C 自分が分かる範囲で、相手に合わせて話した。
- D 気を付けた
- E 気を付けていない
- F 気をつけた。
- G 自分の使っている言葉が方言かどうか分からないため、気をつけようがない
- H 人と接するときは丁寧語を使うので、ほとんど方言は出ません
- I 自分の方言やなまりが通じる場合は使っている
- J 気を付けていない
- K 特に意識せずとも大丈夫でした
- L 相手に話を理解してもらうために、自分の地元の方言の使用は控えました
- M 時々気をつける
- N 特に考えなかった
- O 気をつけた
- P 特に気を付けませんでした
- Q 私はほとんど方言を使っていないと気付きました（言われました）

4 方言の問題への今後の対応について

(方言摩擦の問題などを踏まえてどうすべきか)

4. 1 今後も、宮古やその他の被災地で支援活動を続けていきますか？

- A 続けていく
- B 続けたい
- C 続けていく予定
- D 続けていく
- E 続けていく
- F なるべく続けていきたい。

- G なるべく続けたい
- H 短大を卒業するまで続けていくと思います
- I 続けたい
- J 続けていきたい
- K 続けていきます
- L 続けていく
- M したいです
- N 続けたい
- O 学生生活をしている間はしようと思う
- P 続けていく
- Q 在学中は続けていきます

4. 2 今後、宮古の方言を学びたいと思いますか？

- A 学びたいと思う
- B ボランティアをするうえで。地域の人との壁をなくすためには、方言を学ぶことも大切だと思うので、学ぶ機会があるのなら、学びたい。
- C 簡単なものだけ
- D 学びたいと思う
- E 機会があれば
- F 思わない
- G 思わない
- H 学びたいと思う
- I 現在学んでいるし、共通している方言もある
- J 学びたいと思う
- K 学びたいとあまり思いません
- L 学びたいと思う
- M 学びたいと思う
- N 学べるのなら学んでみたい
- O 宮古の方とのお話の間で学んでいければ

- P 学びたいと思う
- Q 学んでみたいです

4. 3 今後、他地域での災害発生時、支援者として、被災地の方言を学んでから行きたいと考えていますか？

- A そう考えない
- B できるかぎりしていきたい
- C 現地に行ってからでもいいと思う
- D 学んでから行きたい
- E 機会があれば
- F 考えていない
- G 考えていない
- H 学んでから行きたい
- I その地域でネイティブの方言を聞いて学ぶ
- J 学んで行きたい
- K そう考えない
- L そう考えない 優先順位としては低いと思うので、その時間があれば、他のこと（地理や被災状況・支援制度等）を学びたいと思う
- M 学んでから行きたい
- N ある程度の知識は必要だと思う
- O とくに考えていない
- P 特に考えていません
- Q 可能であれば 時間に余裕があれば

4. 4 （一般論として）支援者は、被災地の方言を学ぶべきだと思いますか？

- A いいえ 学ばなくても会話をしていれば、通じると思います。
- B 上記でも述べたとおり、支援する側と被災地にいる人たちとの関係として、支援側が被災地の方言を学び、交流することは大切だと思うが、支援者の地元の方言なども使い、話すことで、交流につながることもあると思う。

- C 「べき」とは言えないが、簡単なものだけでも知っていれば、会話は成り立ちやすいと思う
- D 学ぶべきだと思う
- E 学ぶべきだと思う
- F 支援をしているうちに、だんだんなれてくるものだと思うので、積極的に学ぶ必要はあまりない考える。
- G 人によってだと思う
- H 学ぶべきだと思う
- I 被災地のなかでも、方言やなまりの違いが生まれているので、直接訪れたところで聞いて学んだほうが良いと思う
- J どちらでもよい
- K 学ぶべきだと思わない
- L 学ぶべきだとは思わないが、潤滑な会話がより良い支援につながる可能性は高いと思う
- M 学ぶべきだと思う
- N 通じる程度には覚えたほうが良いと思う
- O その現地の方から学んでいけば良いと思う
- P あまり、そうは思いません
- Q 多少でも学んでおくことは必要だと思います

## 5 方言に関する取り組みの評価について

（方言パンフレットや方言エールなど）

### 5. 1 方言パンフレットは必要でしょうか？

（実物例※をお示しします）

※調査時に、方言パンフレットの例として、東北大学方言研究センター『支援者のための気仙沼方言入門』、および、竹田晃子氏作成『東北方言オノマトペ用例集』を提示して尋ねた。（以下は、その表紙。気仙沼のほうは、現物はカラー印刷）





5. 1. 1 今後、被災地で必要でしょうか？

- A 欲しい
- B 必要だと思います
- C 必要
- D 必要
- E 必要
- F 必要ない。
- G 必要
- H 必要
- I 必要だと思う
- J 便利だと思うので、必要だと思う
- K あれば便利だと思います
- L 医療用など緊急性がある分野においては必要だと思う
- M 必要だと思います
- N あるならあったほうがいい

- O 他の地域から来た人にとっては、あればわかりやすいと思う
- P 必要ないと思います
- Q 医療や役所などの公共の設備には必要だと思います

5. 1. 2 今後、他地域で必要でしょうか？

- A いらない
- B 必要だと思います
- C 必要
- D 必要
- E 必要
- F 必要
- G 必要
- H 必要
- I 必要だと思う
- J 便利だと思うので、必要だと思う
- K あれば便利だと思います
- L 医療用など緊急性がある分野においては必要だと思う
- M 必要だと思います
- N あるならあったほうがいい
- O 他の地域から来た人にとっては、あればわかりやすいと思う
- P 必要ないと思います
- Q あって悪いことはないと思います

5. 2 方言ネット（インターネットにより、必要最小限の方言情報を示す機能）は必要  
でしょうか？

5. 2. 1 今後、被災地で必要でしょうか？

- A 欲しい
- B 必要です

- C 必要
- D 必要
- E 必要
- F 必要ない
- G 必要
- H 必要
- I 必要だと思う
- J あれば, 必要だと思う
- K あれば便利だと思います
- L 被災は関係なく, 文化的な面白みのためにはあってもいいかなと思う
- M 必要だと思います
- N あるならあったほうがいい
- O あれば便利だと思う
- P あってもいいと思います
- Q 必要 とても良いと思います

5. 2. 2 今後, 他地域で必要でしょうか?

- A いらない
- B 必要です
- C 必要
- D 必要
- E 必要
- F 必要
- G 必要
- H 必要
- I 必要だと思う
- J あれば, 必要だと思う
- K あれば便利だと思います
- L 被災は関係なく, 文化的な面白みのためにはあってもいいかなと思う

- M 必要だと思います
- N あるならあったほうがいい
- O あれば便利だと思う
- P あってもいいと思います
- Q 必要

5. 3 被災地方言による方言エールは被災地の方の力になると思いますか？

（注）この冊子の末尾に『画像例』※がありますので、ご参照ください。

※次ページの『画像例』（現物はカラー）を回答者に提示して尋ねた

- A 力になる
- B 力になると思います
- C 力になると思う
- D 力になる
- E 力になると思う
- F 力になると思う



- G 力になると思う
- H 力になると思う
- I 力になると思う
- J 力になると思う
- K 力になると思います
- L 地元の言葉であれば、親しみやすく合言葉のように力になるかもしれない
- N 自分の地域の言葉を使われるのはうれしいと思う
- O 力になると思う
- P 少しは力になると思います
- Q 力になると思う

5. 4 共通語によるエールについてはどうでしょうか？

(注)「がんばろう東北」などのことです。

- A 良いと思います
- B 全国に統一的な意識がつくと思うので、良いと思います。
- C 共通語であれば分かりやすい
- D なると思う
- E 力になると思う。
- F 他人事っぽく感じる
- G 良いと思う
- H 「全国の人々の総意」のように感じられるので、良いと思います
- I インパクトが足りない
- J なると思います
- K 力になると思います
- L どこか他人行儀なものを感じる
- M 力になると思う
- N エールがあるだけうれしいと思う
- O 全国の人に忘れてもらわない意味では必要だと思う
- P 力になると思います

Q 力になると思う

5. 5 支援者の方言による方言エールについてはどうでしょうか？

（注）「チバリヨー東北」（沖縄）などです。画像例をご参照ください。

- A 良いと思います
- B とても良いと思う
- C なんとなく親近感を覚えるのではないか（？）
- D なると思う
- E とてもいいと思う。
- F 地域全体で震災について考えているという印象をうける
- G 良いと思う
- H 「その地域の人々の総意」のように感じられるので、良いと思います
- I 東北の言葉でのエールが良いと思う
- J なると思います
- K 分かりません力になると思います
- L 各地から応援してもらってる、という意味では、力になると思います
- M 力になると思う
- N 身近にいる気がしていいと思う
- O その地方の方が応援してくれている気持ちが伝わっていいと思う
- P 力になると思います
- Q 力になると思う 何でもエールは力になると思います

6 方言への評価について

（方言保存、継承や、被災地方言への好悪）

6. 1 被災地の文化の保護は重要だと思いますか？

- A 重要だと思う
- B 重要だと思います
- C 重要だと思う

- D 重要だと思う
- E 重要だと思う
- F 重要だと思う
- G 重要だと思う
- H 重要だと思う
- I 必要だと思う
- J 必要だと思う
- K 重要だと思う
- L 重要だと思う
- M 重要だと思う
- N 大事
- O 重要だと思う
- P 重要だと思います
- Q 重要だと思う

6. 2 被災地の文化として、方言は重要だと思いますか？

- A 重要だと思う
- B 重要だと思います
- C 重要だと思う
- D 重要だと思う
- E 重要だと思う
- F 重要だと思う
- G 重要だと思う
- H 重要だと思う
- I 重要です
- J 必要だと思う
- K 重要だと思う
- L 重要だと思う
- M 重要だと思う

- N 大事
- O 重要だと思う
- P 重要だと思います
- Q 重要だと思う

6. 3 被災地の方言を保護し、継承していくべきだと思いますか？

- A 継承していくべきだと思う
- B 継承していくべきだと思う
- C 継承していくべきだと思う
- D 継承していくべきだと思う
- E 継承していくべきだと思う
- F 継承していくべきだと思う
- G 継承していくべきだと思う
- H 継承していくべきだと思う
- I 継承していくべきだと思う
- J 継承していくべきだと思う
- K 継承していくべきだと思う 最低限、記録は残すべきだと思います
- L 継承していくべきだと思う
- M 継承していくべきだと思う
- N 継承していくべきだと思う
- O 継承していくべきだと思う
- P 継承していくべきだと思います
- Q 継承していくべきだと思う 被災地にかぎらず

6. 4 被災地の方言は好きですか？ 愛着を感じますか？

- A 愛着を感じる
- B ボランティアをしてきて、さまざまな人と話して好きになりました。
- C あまり使わないけど、地域独特のものであるから好き。
- D 好き 愛着を感じる



- E 好き 愛着を感じる
- F あまり感じない
- G 好き 愛着を感じる
- H 特に何も感じません
- I 母国語です
- J 愛着を感じます
- K 好き 愛着を感じる 地域の暖かみがあります
- L 新鮮で、とても良いと思っています
- M 特に感じない
- N 好き 愛着を感じる
- O 好きです
- P 好きです
- Q 愛着はまだありませんが、好きです

6. 5 支援者である、あなたご自身の方言は好きですか？ 愛着を感じますか？

- A 自分が方言を使っているのか、よく分からない。
- B 小さいころから家族の人と話していたので、好きです
- C あまり使わないけど、方言はいいと思う。
- D 好き 愛着を感じる
- E 好き 愛着を感じる
- F 好き 聞くとホッとする
- G 好き 愛着を感じる
- H 好きです
- I 方言は好きです
- J あまり思わない
- K 好き 愛着を感じる
- L ずっと話してきた言葉なので、愛着を感じています
- M 特に感じない
- N 好き 愛着を感じる

- O 好きです
- P 好きです
- Q 好き 愛着を感じる

6. 6 その他、方言に関するお考えを、何でも結構ですから、教えてください。

- A 方言はあたたかい。
- B 特になし
- C (無記入)
- D (無記入)
- E 方言はあたたかい感じがするので、とてもいいと思うし、これからも、残してほしい。
- F 方言でしか伝わらないものもあると思うので、これからも大切にしていきたいと思います
- G (無記入)
- H (無記入)
- I その地域に行って直接ネイティブな方言は聞いた方がいいと思う
- J とくになし
- K (無記入)
- L (無記入)
- M (無記入)
- N その地域の形のない文化だから、守っていくべきだと思う
- O (無記入)
- P 聞きとれなくて、少しストレスになるときもあるけど、方言は好きな文化です
- Q (無記入)

## 7 考察

「1」で述べたとおり、この調査は、選択肢を設けることもなく、数量集計もしない非構造的調査であって、今回の回答者数も少数なのであるが、そのなかで、傾向の見られる

部分もある。以下、各々の質問ごとに確認していく。

#### 7. 1 支援活動の内容とコミュニケーション状況に関して（方言で話す人と接する機会があるかなどについて）

「2」で示した回答によりみる。

「2. 1」の回答は多くが「ある」となっているのは、今回の回答者の支援活動の内容は、サロンボランティアや傾聴ボランティアなど、被災地住民と親しくことばを交わすものだからである。これは、筆者も引率者として同行した機会もあったし、「2. 5」の回答からも確認できる。

「2. 3」と「2. 4」にあるように、相手の多くが宮古の方言を使用していた高年層の話し手であった。「2. 6」のとおり、方言通訳はいない場合が多かった。

#### 7. 2 方言の問題（被災者との間の方言摩擦の問題）について

「3」で示した回答によりみる。

「7. 1」で整理したとおり、相手は方言で話す高年層の話し手の場合がほとんどだったが、そういうなかでも、「3. 1. 1」のとおり、戸惑ったりした回答者は3名であった。これは、宮古市の方言自体が、他の東北地方の方言に比べ共通語に近いということが第一の理由として考えられる。また、実際その場にいた筆者の感触として、被災地住人が、相手が学生（他人、青年）ということで、意識して共通語使用をしていたふしも伺える。

#### 7. 3 方言の問題への今後の対応（方言摩擦の問題などを踏まえてどうすべきか）について

「4」で示した回答によりみる。

まず、「4. 1」より、全員が今後も支援活動を継続したい意思を有しているのは、学生赤十字奉仕団また社会福祉協議会という組織に属している人なので、その志の高いことが伺える。

「4. 2」と「4. 3」の、自分の支援する地区の方言を学びたいかどうかは、消極的な回答が多いが、これは、前項のとおり、学ばなくても意思疎通に支障のない経験をしたからであろう。これは、「4. 4」の回答からも理解できる。

#### 7. 4 方言に関する取り組みの評価（方言パンフレットや方言エールなど）について

「5」で示した回答によりみる。

「5. 1」の方言パンフレット、「5. 2」の方言ネット、について、肯定的見解が圧倒的である。これらを作成し、被災地に提供している研究者の努力について、その必要性が証明されたと言えよう。

「5. 3」の方言エールも、全回答者が肯定的見解を示し、さらに、「5. 5」の他地域の方言によるエールでも、他地域からの支援の気持ちが伝わると感じている。

ただこれらのなかでも、「5. 4」の共通語によるエールだけは、肯定的評価が多いものの、「他人事っぽく感じる」「インパクトが足りない」「どこか他人行儀なものを感じる」と否定的見解もある。やはり、方言が地域住民の心に直接訴える力があるとの見解であろう。筆者も共通語によるエールには、「よそ事」の感を抱いている。そもそも先に使用されたのは、方言エールであり、震災後2日目には、使用例が確認されている。共通語によるエールは、それまでに使用されていた方言エールを受けて、震災後数週間から1ヵ月後あたりから使用されるようになってきたものであり、源は方言エールなのである。

#### 7. 5 方言への評価（方言保存、継承や、被災地方言への好悪）について

「6」で示した回答によりみる。

「6. 1」の文化の保護、「6. 2」の文化としての方言の重要性、「6. 3」の方言の保護と継承、については、すべて肯定意見である。

「6. 4」被災地の方言に対する好感と愛着も、ほとんどが肯定的であり、「6. 5」の回答者自身の方言に対する好感と愛着では、全員が肯定意見であった。

方言に対する好感や愛着は、年配者だけが抱く感情ではなく、現代の青年も、積極的に抱いているとみて良い結果である。

また、任意記載の「6. 6」の方言に対する感情全般でも、記載した回答者は、基本的に、方言の価値を高く評価している。

## 8 まとめ

回答者は、筆者が顧問を勤める岩手県立大学宮古短期大学部学生赤十字奉仕団の学生たち、および、普段からご指導をいただいている社会福祉協議会のご担当者であった。そういうわけで、筆者は共に活動することも多く、活動の状況また個々の会員学生の人物人柄などは、おおむね把握しているので、回答の記述の背景なども理解できた。

回答者の情報として、「出身地」を入れたのは、回答との相関関係があるかもしれないと考えたからである。たとえば、宮古市の方言と似た性質の方言の地点の出身者は、宮古の方言に違和感を覚えることが少ない、などの、傾向があるかもしれないからである。元来数量集計をしない「非構造的」調査としながらも、このあたりは、興味をもって見てしまうものである。しかし、調査時に18~20歳の青年だと、高年層の話し手との年代差が圧倒的に影響する。つまり、言語形成期生育地の方言であっても、高年層の話し手の使う方言について青年層の理解度は、相当低く、それが他の地点（今回は宮古市）の方言になっても、その低さのなかでの理解度の差となる。よって、出身地による傾向は、この資料においては考慮しないほうがいように思われる。

それよりも、方言の意識に影響しているのは、言語に対する関心度の差であるように思われる。自由記述方式だからこそ読み取れることに、記述や筆致の丁寧さである。個人の性格もあろうが、言語への関心が高い回答者ほど、丁寧に記述していて、そういう回答者は、方言の違いやコミュニケーションにおける言語の運用に関しても、敏感であるように思われる。

#### 《補注》 岩手県立大学宮古短期大学部学生赤十字奉仕団について

今回調査に協力していただいた岩手県立大学宮古短期大学部学生赤十字奉仕団（以下、「当奉仕団」とする）について、以下に、少々説明する。

当奉仕団は、平成19年秋から筆者と初代委員長との2名で準備を始め、平成20年度の活動開始以来、宮古市社会福祉協議会との緊密な連携のもと、地域の住民の要請に応えるよう、赤十字精神を基礎に、地域密着の奉仕活動を、自らの計画により持続的に実施している。

平成23年3月の東日本大震災発生以降しばらくは、支援物資の仕分け、および、海底泥の撤去などの津波被災地の清掃、あるいは、被災者支援を主に活動してきた。それも、社会福祉協議会との以前からの関係が功を奏したものである。社会福祉協議会で本奉仕団との協働の担当者小林さつき主事が、震災後はボランティアの采配を担当していたので、本奉仕団も小林主事の指導下、震災直後の、自衛隊や警察また医療関係者の緊急救援期終了後、すぐに活動に入り、支援物資の仕分けや

がれき撤去などに従事することができた。

当奉仕団は、震災後に急遽活動し始めた団体という性格ではないので、震災後の急性期援護活動をおおむね終えた頃から、震災前の活動に復することを基礎に、活動の中心軸を被災者の心理支援に置くようにした。震災前からの Donabenet（地域の人に鍋料理を振る舞って交流する活動）を、仮設住宅のサロンで開催し、被災地で勉強する学生として、共に励まし合いつつ努力することを確認し合えた。平成24年4月には、東京から望んで宮古を訪れた創作パン料理研究家、梶晶子氏（『ポリ袋で作る天然酵母パン』文化出版局より刊行の著者）とともに、宮古キャンパス近接の仮設住宅でパン教室を開催し、好評をいただいたが、これも、Donabenet で料理提供の基本を養っていたことにより、スムーズに開催することができたものである。

また、当地の児童・生徒は震災の影響により学習に支障の出ていることから、社会福祉協議会との連携のもと、中学生に対する学習支援を、2地区で、毎週各地区週に1回、継続実施している。より年少の子どもたちには、「こどもパーク」（同じく週に1～数回）で遊びを通じた知育活動を行っている。

さらに、山田町社会福祉協議会からの要請を受けて、被災写真（洗浄済み、千数百枚）の電子データ化を終えた。これは、団員個々人の調整可能な時間を利用して、しかも、学内において作業を進めることが可能なので、休日等の学外での活動が事情により難しい学生も参加することができた。

その他、「あきんど復興市」などの復興関係のイベントの開催補助にも積極的に参加した。

平成24年9月には、アメリカ、オハイオ大学の訪問団を迎え、活動の説明を行い、翌日にはともに支援活動を行うなど、国際交流も経験した。

前述のとおり、（震災前からの）地域奉仕活動も復活させ、以前からの継続である、老人ホーム行事開催補助、赤い羽根共同募金や日本テレビ系列24時間テレビの募金活動への協力、障がい者スポーツ大会の補助など、その他さまざまな、まさしく多岐にわたる活動を行っている。

これらの他、障がい者私宅の清掃作業に取りかかり、また、広く、団員外の学生も活動に協働することが可能な方策を準備している。

当初、顧問教員である筆者と、初代委員長との2名でスタートしたが、平成24年度には、会員数70名となり、同年6月に、日本赤十字社から正式に「学生赤十字奉仕団」として登録された。日本赤十字社において、これまで、そして、現在、さらには、将来見込まれる活動が、赤十字の一員としてふさわしいことが認められたわけである。岩手県の大学で、単独で奉仕団が登録されているのは、岩手大学と当短期大学部のみであり、また、東北地方の短期大学で、学生赤十字奉仕団を結成しているのも、当短期大学部のみである。平成23年度および24年度には、その活動が大学に認められ、岩手県立大学学長奨励賞を戴いた。

この調査でも、「4. 1」の「今後も、宮古やその他の被災地で支援活動を続けていきますか？」に対しては、全員が、「続ける」旨の解答であったとおり、今後の活動においても、その責任を十分果たすべく、より一層の努力をしているところである。